

516
170

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

始





臺灣



一
晴
世
の
台
橋
北
原
小
碓

大正
三十二
年八月二十三日
内交

若

576-170

自序

臺灣に旅すること二度、何か臺灣に關する感想記やうのものを書いて見たら何うかと友人の誰彼から云はれることもあつたが、筆不精なるが故に其れも出来なかつた、處が縁あつて東京大勢新聞社の理事になつてから、時々書かねばならぬ事もあつたので、或る時何か書いて見やうかしらと不圖思立つて筆を手にして書き出したのが此の一瞥記である。暇に任せてのなぐり書きであつて見れば、書きかけて書き終るまでには一小冊子ではあるが、相當の時日を要したので、例へば人事に關する記事の如き或は故人になつた人も二三あ

るが、其等のことも其儘に訂正せずにある何うせ氣まぐれの書きなぐりだから、さればこの氣まぐれ日記に知名の士の序文を掲載するのも何うかと思はれるから、序文も二三はあるけれども皆一様に掲載を見合はせた、其れは其の人方の名譽と地位とを尊重して、

大森の宿居にて

大正十二、七、七、

嘯 堂 山 人

目 次

序 文……………一

臺灣への旅……………一

船上にて……………二

船上第二日……………六

船長さんの心盡し……………九

上 陸……………一〇

思出されることども……………一一

温泉宿の朝……………一一

臺銀副頭取森さん	一七
總督東上の日	一三
總務長官賀來さん	一六
臺灣神社	一六
警務局長相賀さん	一九
高木さんと電力會社	二〇
小倉和市さん	二三
嘉義にて	二五
皿谷廣次君	二六
枝さんと嘉南大圳	三一

八田技師	四一
大賀さん	四三
高雄の知事さん	四五
吉岡知事	四八
日月潭と電力會社の工事	五一
進退谷まれる林猷堂	五四
臺中の立川知事	五九
臺灣新聞の宮島さん	六一
林態徴さん	六三
風流部長さん	六四

臺灣製糖の山本さん	六六
臺北の知事と内務部長	六八
顔雲年さん	七〇
臺灣での成功者	七一
阪本素魯哉さん	七二
古賀三千人さん	七四
赤司初太郎さん	七六
數田輝太郎さん	七八
木村 匡さん	八〇
後宮信太郎さん	八二

思はぬお客	八三
支那料理	八六
南國情調	八七
生蕃人	九〇
平山さんの熱心ぶり	九二
田總督閣下に呈す	九四
吹くな嵐よ	一〇一
船内の餘興	一〇六
上 陸	一〇七
東京に在住する臺灣系の人々	一〇八

下村前長官	二〇九
藤山雷太さん	二一六
横 哲さん	二一八
田村藤四郎さん	二二〇
相馬半治さん	二二三
伊澤良立さん	二二四
角 源泉さん	二二六
牧山清砂さん	二二九
中川臺銀頭取	二三三
山成喬六さん	二三七

船會社のことども	二三九
三井鈴木の争覇戦	二四〇

目 次 (終り)

高砂の島にあやしき雲ありて

下界の相の亂れほの見ゆ

※ ※ ※

檳榔樹の葉風さやかに湯上りの

晝寝の夢を蚊に起されぬ

嘯堂生

臺灣への旅

東京を發つたのが大正十一年一月十二日午前十時半、翌十三日午前八時半名古屋着、名古屋までは家内と子供連れ、それは名古屋に家内の兩親があるんで予が旅行不在中東京の留守は書生に任せ家内と子供は兩親の處に居ることになつてゐたからである。

名古屋に一休みして午後四時何分發かの特急列車に下之關までの身を任せる、家内の里で御馳走になり過ぎたので汽車に乗ると間もなく眠むりに入る、眠から醒めたのは夜も十二時過ぎ、汽車が岡山に着いた時であつた、三時頃から亦眠むりに入る、今度は三田尻で

醒める、外は綿を千切つて投げるやうな大雪でモウ野も山もたゞ一面の銀世界、今汽車は小郡と下之關の中間を走つてゐる。

九時三十分に下之關に着かねばならぬ汽車が雪のために十時五分前に着く、それから關門海峽を連絡船で門司に渡り切符を求めて臺灣通ひの郵船會社所有船備後丸に乗り込む。

船 上 に て

船室は一等定員二人の規定だが乗客が少なかつたので一室を一人で占領されたのは何よりの幸福であつた。

和服に着換へて食堂に入る、食堂から歸ると抜き捨て、置いた洋

服が受持ボーイの手にて奇麗に始末され室内も整然と片付いてゐて氣持が好い、甲板には幾多の人が忙しげに右往左往する、其の間を新聞賣子や小説講談本の賣子が來て、これは先達て發賣禁止になつたもので内容はなか／＼面白などと出鱈目を並べ立てては客の買氣を煽る、ここらが所謂商賣道に依つて賢なりとでも云ふ處なるべしか、東京を發つ時に歌集だけはトランクの中に詰込んで置いたが其他の本は一冊も用意して來なかつたので船の上にての徒然にもがたと近松秋江の黒髪と長田秀雄の明けがたの二冊を求め、外に見るべきものもなく總べてのものが赤本式の低級なものばかりであつたから、先づ長田氏の明けがたを讀むで見ると、材料は松井須磨子を

主人としたものだが、讀むで見ると一向に感興が起らないから中途で嫌氣がさす、今船は靜かに海上を迂りつゝ目的地に向つて進行を續けてゐる、大里の濱邊は何時見ても美しい、無数の水鳥は船の周圍を飛び廻はつてゐる、斯う靜かだと海上に居る様な氣持ちは少しもない、此分ならば樂な航海ですよと甲板の此方彼方で話合ふ客の聲にも元氣がある。

(4)

船が門司を出てから二時間半、哩數にして十二哩を走つた頃今まで靜かであつた波がだん／＼と高くなり船體爲めにソロ／＼傾きかける、そうなると乗客の神經が鋭くなる、食堂では廿人あまりの客が食卓を前に門司を出帆するとき暴風雨あり警戒を要すと云ふ警

報があつたから、或はそれが愈々御見舞するのではないかと不安顔の男がある、ト余が隣に座してゐた偉丈夫がモウ其の危険區域は通過してゐる筈だと云ふ、其人は後にて聞けば馬公司令官の任に新しく就くべく其の赴任の途にある飯田海軍中將であつた。

何れにせよ我等に暴風來は大の禁物、だが御見舞するものならば致方ない事と諦める外はない、こんな時には眠むるに限ると一人で合點しつゝ大急ぎで酒を呷りつけて寢臺にモグリ込む、グツスリ寢込んで明けがたの四時頃さめると昨夜危まれたる暴風來の模様もなく至極平穩で船は暗の中をひた走りに走つて居る。

泡と消え夢と消えにしまぼろしの

(5)

花は萌黄がはた紅か

血に燃えし花は椿か凄婉の

その色今もまぼろしに見ゆ

船上第一日

朝六時に入浴・浴後甲板に出づれば潮風颯々として肌に迫まるの
状は到底紅塵の下に生活する都人には思ひも及ばざる情越がある。

波濤けり青海原をひた走る

明けがたの天紅に燃ゆ

日の神の光燦たり海原の

(6)

波は紅珊瑚の玉か

今朝はモウ山も見えで見渡すかぎりたゞ測々乎たる青海原、其の
大海の眞つたゞ中の航海である、船路遙けくして今日も明日も青海
原に浮かむ六千噸の備後丸の一室が假の宿で、あと一日一晚を船の
上で送らねばならぬかと思へば我ながら何んとなく淡い旅愁に打た
れる。

(7)

船上第三日

鞆々と鳴るは荒波船の上

夜明け待つ間のいと長き哉

昨夜又もや嵐が來たそうでもあり、それに少し軀の調子にも狂が來たやうにも思へたので夕方早やく寢に就く、夜半浪に起されて時計を見れば十二時半、モウ一寢入せねばならぬと思つて眠むりに入るべく務めて見れど眼は益々冴へて寢つかれずベットの所で四時近かくまでも轉々する苦しさ、ウツラ／＼と夢路を辿るころボーイが入浴を報らせに來る、何時の間にか七時半になつてゐた、今朝は空に雲影ありて船上の眺も左程にあらざれど、さればとて陸上にての朝に優ることは云はずもかな、扱て門司を出る時には長がいと思つた航海も彌々今日を以て終りを告げ明早朝は憧れの港につくかと思へば白づと氣も勇めば心も躍る。

船長さんの心盡し

今宵は乗客と船の人達とが名残りの一夜である、されば船長さん達も料理人に命じて腕に燃やをかけさせての料理と見えて、いろ／＼の料理が運ばれる、隣席の飯田海軍中將がこの七面鳥の料理が出るのは西洋料理の内でも餘程御馳走の方だと説明してくれる、だが洋食に就ては何等の趣味も持たず且又元來酒を愛する我等あまりに好きでもないで折角運ばれる心盡しの料理の數々も手をつけること稀で、ただウキスキのポップを傾けるに忙しいのみである。

船の中での親しみは又格別なもので門司を出てから僅かに四日だ

のに乗り合はした誰れも彼れもが恰も十年の知己でもあるかの如く明日別るれば又何時の日に相會ふものやら、其れさへ覺束ないお互同志の仲なるに、夜遅くまで名残の一夜を甲板のあちらこちらで語り交はすも美しき人情の發露なのか。

上 陸

十七日未明船は基隆港内に横着けにされる、臺北の旅館朝陽號から業々迎ひに来てくれてゐたので荷物の面倒を見るの煩はしさもなく、八時半の列車にて臺北に向ふ、列車から見る熱帯地の風光も風俗も曾遊の地であつて見れば左程に物珍らしくはないが、故里は筑

波風の吹くと云ふ此頃を熱帯性の植物が紺青の色を漂はして見るからに生氣あり、窓外を渡る風も肌心地がよいので、戀人にでも久々振りに逢つたやうな嬉しい心持がする、懐かしき四邊の風光に惚々としてゐる間に汽車は何時しか臺北ステーションに入り込む。

思出されることども

旅館に落付いて一風呂浴び晝食を済まして總督官邸を訪問し轉じて秘書課に舊知の諸君や相賀警務局長を訪問して歸館、夕方五時半から日本亭で親しき人々五六と酒を呼ぶ、思へば今は四年前まだ下村さんが民政長官であつた時分に渡臺せる時此處には時折り遊びに

来たことがあり、其れに座に居る藝妓の中にも顔馴染があるので話も賑かに時の過ぐるも忘れられて十二時過ぎまで飲み續ける、酔へば興益々募るが酒を好む人の通有性として酔つて何うやら足許も危ながしいのに我は一同と別れてから北投に自働車を飛ばす、勿論藝妓の誰れ彼も一緒に、北投は臺北に近かき所謂デカタンの地、其のデカタンの地に来てデカタンの氣分に浸るも時にとりての面白味がある湯煙り立つ態を眼下に眺めて湯浴みして後の酒は、之れ酒に親ます遊びに慣れざるもの、到底、想像も及ばざるものがある。

我等が宿りし旅館大和の女將おみよさんは其の以前臺北一の料亭梅やしきの養女で、美人のおみよで名高かりし人今は前代議士樋口

氏の奥さんで納まり昔しのいろくの浮名も知らぬ顔なるもおかし寸度おみよさんが今は奥さんで人の子の親となつて納まつてゐるやうに四年前艶名を南のはてに謳はれてゐたそれくの美形の中にも鳥を去りて内地に歸れるもの、或は料亭の女將になれる人、又は旦那に落籍されし人と、浮川竹の人々にもそれくの變轉があり僅か四年の間にガラリと様子が變はつてゐるのも此の社會なればにか、

總督東上の日

今日午後二時十分臺北發の列車で總督は東上の途につくのである日頃さへ出迎の客が雜踏する狭まき臺北ステーションは今日は殆ん

ど立錐の隙だにない、やがて小柄なれども威風堂々馬車をかりて來るは時めく臺灣總督男爵田健次郎閣下である、打見れば制服の胸間に勳一等が燦然たる光を發つ、此時既に總督列車はホームに廻されてある、やがて新元鐵道部長先導、相賀警務局長警衛して後へに續く、やがて汽車は徐々として進行を初める、見送りの諸名士は總督の嚴肅な風格に打たれてか何れもが緊張する、余は發車と同時に總督列車の人となり閣下と相對して座席に就く、車内は即ち總督と新元鐵道部長相賀警務局長と余の四名のみ、車内四方山の話で賑合ひなかに新元部長が何時も話題の中心をなしてゐる、君は風流部長として知られ三十一文字が得意である、臺灣鐵道の沿革から歌の話

とそれからそれへと部長は話の枝に花を咲かせつゝ列車は何時しか基隆驛に靜かに入り入るのであつた。

此處にも見送人が群を成してゐて總督の威勢なか／＼に素晴しきものあるを偲ばしむる。岸壁から小蒸汽で本船に移ると備後丸の食堂で總督閣下の旅や幸あれとて、事務長の發聲で見送りの人々は手／＼杯を高かくあげて其の行を送る誠に以て盛んなものである、

臺灣神社

臺灣に來る人も臺灣から内地に歸る人も必ず丸山の臺灣神社に詣でるの例になつてゐる、我等此地に來て今日で八日になるのに未だ

に詣でない、神罰のほども之れでは恐ろしいとばかりに俄かに思立つて神社詣でを成す、神社は淡水の流ゆるやかに樹木鬱蒼たる深山を後に最も崇巖を極めてゐる故北白川宮殿下此處に安らかに眠むらせ給ひて高砂の島を守らせ玉ふ、と思へばありし昔の事ども偲ばれて涙滂陀として萬感胸を打つ。

竹筏を乗せて流るに淡水の

丹山わたり夕日うつつく

賀來總務長官

長官久しく病氣であつたそうだが、逢つて見ると多少病後のやつ

れはあるけれどもなか／＼元氣に見受けられる、初めて逢つた長官の印象、其の風丰に堂々として人を壓するの重味はないが飽迄も官吏型の至極眞面目な人らしく思はれる、即ち前長官下村宏氏とは全然異なるタイプの所有者である、其の一見事務家的な長官に接して我等に成程と思はれるは現總督田さんが事務家的タイプの人だから其の下に長官たる人は寧ろ下村氏の如き人よりも賀來さんの如き型の人が最も適任のやうにも思はれる、何んとなれば武官總督時に於ける長官と、田さんの時に於ける長官の地位とは大なる相違があり現長官としては事務官で足りるの觀があるからである、此の意味に於て現長官は誠に以ては、まり、役の人であると云はねばならぬ、但

し世評のよしあしは我等の關せざるところ。

臺灣銀行副頭取森さん

一日森さんを其の社宅に訪れる、森さんは臺銀に副頭取の任に就くまでは大藏省に銀行局長として名聲ありし人、待つ間程なく應接室に姿を見せる、相見ぬ以前はも少し老人かと思つてゐたのに、相見て余が想像のあまりに離りがあるのに驚いた、さればと云つて敢えて我等は老人崇拜ではないけれども、扱見る君の風采は金融機關の樞軸を握る人として今少しく覇氣があつてほしいものだがまあ銀行家として且つ頭取を補佐して行く人たるの立場である君には

寧ろ覇氣満々たるの人よりも其の温厚なる風格反つて現頭取中川さんともシツクリ合つて事務の圓滿を期し得られるかも知れぬ、何んとなれば中川さんが頗る豪放な人だけに我等に爾かく思はれるのである、だが豫想と事實は相異なるものか此の圓滿福德家たる森さんは任期半ばにして臺銀を辭し今では滿鐵理事として同社の金融方面を握り今は東京支社長として得意の地位にゐられる。

警務局長相賀さん

賀來長官公室を辭して同じ建物内の警務局に局長相賀さんを訪問する時しも下僚二名の人と卓を圍みて何事かを密議してゐられたの

で暫ばし遠慮する、相賀さんは小柄なれどもピリットした小氣味好き快男兒、今臺灣全島の警察權を覇握して特意の絶頂にあり、督府部内に局長も地方に洲知事の勅任級も夫々居るが我が相賀さんは其等勅任級中嶄然として出色し殖民地の官吏としては過ぐるの觀がある、我等は相賀さんのために何時までも殖民地の官吏たるを以て甘んぜず、中央に打つて出られる日の一日も早やからんことを切望するものである。

(20)

高木さんと會社

醫學博士の高木さんが營利會社の社長さんとはチト取合せが妙で

ある、之れも殖民地だからと思へばそれまでのこと、一體高木さんとはどんな人かと想像を畫きながら訪問する、

逢つて見れば成程此人ならばと頷かれる節もある、だが同社の前途はなか／＼に遠い、頭初に於ける設計費の豫算額は四千八百萬圓であつたが所詮其の豫算額では不可能で超過額壹千百萬圓以上を突破せねば工事の完成は期し難き模様である、それ豫算と實際費用とは往々にして反比例する、さてそれは兎も角として工事完成後十三萬馬力の電力が島内で消化されるものか何うか、其點に就て社長高木さんの説明を求むるに、それは左程に心配することもないやうですと事もなげに仰せられる、社長さんは爾かく左様に事もなげに云

(21)

はれるけれども十三萬馬力の消化は左様に簡短に行くものではない
此の六千萬圓の大會社、而して資本が固定する電力會社、若夫れ工
事首尾好く完成後其の需要關係に圓滿を缺けるの時代あらんか會社
の經營も自然困難になる、あまりに消化力を多大に見積らす今日よ
りして細心の注意が必要ではあるまいか高木さんも、副社長の角さ
んも共に總督府の官吏時代には利け者であつたと云ふ話だが、實業
家としては御兩人共未知數だ、而かも斯かる難物の會社に長たるか
らには餘程の覺悟がなくてはならぬ我等は島界工業界發展の爲めに
社長高木さんにシツカリして貰らひたいものである、

小倉和市君

臺北を夜の九時二十分に發つて翌朝四時廿五分嘉義着、宿に一休
みして十時頃から大日本製糖の小倉和市君を訪問するべく驛に行く
と明糖の相馬さんも乗つてゐる、聞けば明日の船で内地に歸るのだ
そうなる、斗南で下車して大日本製糖の經營になる汽車に乗るべく停
留場に行くと驛の助役さんが北原さんぢやないかと聞く、そうです
と答えると乗車券をくれる、着驛には小倉君が出迎ひに来てゐられ
る、東京在往の頃は會社員に不似合な天神髯を生やしてゐたが逢つ
て見ると上も下も奇麗に剃つて若返つてゐる、食堂で副理事と云ふ

方に紹介され三人卓を圍むで食を攝る久々振りの會見で話に花が咲き例に依つて小倉君の氣焰益々あがれば我等も劣けずに談ずる、斯くて話はなか／＼盡きず尙ほ話したきいろ／＼のものがあつたけれども午後からは重役會議があると云ふことを前以て聞いてゐたので今度は話を切りあげて工場を見せて頂く、工場に於ける諸機械の設備は素人目にも完備してゐるやうに思はれる、推高かく積まれてあるキビは機械で捲き込まれ、その捲き込まれたのは機械で壓搾されてドン／＼砂糖汁が出る、その汁が砂糖になるまでにはいろ／＼の機械の道程を経ねばならぬ聞けばキビから砂糖になるまでの時間は十時間餘であると、此處の工場能力は一日壹千俵と云ふに使用人は

僅かに百人足らず、内地の職工共が待遇を好くせよ、時間は八時間になど、贅澤を並べてゐるのに此處では高熱百度を下らず労働時間十二時間を何等の不平もなしに機械の廻轉につれてよく働いてゐる我等は此の狀を内地の労働者に見せたいものだと思つた、

嘉 義 に て

冬と云ふにばらもつつじも庭もせに

に今を盛りの常夏の國

檳榔樹の葉風さやかに湯上りの

晝寢の夢を蚊に起されぬ

故里は筑波風の吹くと云ふに

蚊帳吊して其の下に寝ぬ

茄子は伸び今豌豆の花盛り

臺南の冬日かげ慕はし

嬌名を南のはてに謳はるゝ

彼の妓さだめし淋しみかるべし

皿谷廣次君

新營庄に鹽水港の皿谷君を訪ねる、車窓から眺める四邊の風光誠によし、見渡すかぎり廣々とした平野で氣分も何んとなく大陸的に

車中句あり、

かにかくにさすらひの身は氣安けれ

今日東明日は南に

竹林の中に蕃社のほの見えて

椰子の葉がけに夕日うすつく

などと黙句を飛ばしてゐるうちに何時しか新營庄に着く驛に社員の人が見えてゐる、皿谷君は折りしも重役室に忙しげに事務を見てゐるところであつた、君は年齢四十に達せず短身肥大の偉丈夫、重役に推されて日尙ほ浅いか社長の榎さんも常務の藤崎數田兩氏共に東京出張所詰で、本社には營業方面の重役としては君一人のみであ

るそれは社長の横さんが君の力量と人物とに信頼して重き責務を斯くは任せて置くのである、思へば君の責任も重且つ大なりと云はねばならぬ、

晝食の御馳走になつてから六哩の距離にある岸内工場見物に皿谷君の御伴をする、自働車は坦々たる道を走る、平野漠々見後すがきりにキビが植えられてある、時二月初旬なるに炎熱汗を流すと云ふ有様、されば車上に吹く風も肌心地よく四邊の風光に惚れくとしてゐる間に自働車は早やくも工場玄關前に横付けにされる、此處の工場長はなかくに趣味豊かな人で島内有數の俳家だそうなる、成程そう云はれると其の風丰からして俳味タツブリで會話を交へてゐる

も氣持ちかヨイ、

皿谷君の説明する處に依ればこの工場は誠に因縁淺からざるところで横さん其の上この破れ工場に陣取つて狐單奮闘ならぬ奮闘を續けた云はゞ鹽水港發祥の地、横さん今にして此の工場に來たり往事を追懷せば定めし感慨深かきものがあらう、などと説明を聞きつゝ想像の翼に身を乗せながら工場を一覽する、場内もろくの機械か間斷なく廻轉するのは男性的で勇ましい、其の高鳴る機械の廻轉につれて黙々として働く職工連の態度は極めて眞面目である。眞面目で好く働いてくれる、それも内地より安い賃銀で、だから製産費も従つて安くなると云ふ譯で、ここらが製糖會社經營者の心丈夫な處

であらうと感心しつゝ、場内を一巡して應接室に歸る、

歸途新營社の本社近くに蕭洒たる建築物が目につく。それは學校で、鹽水港製糖會社に社員たる人々の子を教養すべく經費三十萬圓を投じて建てたもので目下幼稚園の生徒を合せて百五十名居るとのことである、斯うした面倒を見る處にも楨さんの反影否な片鱗が窺はれる、

俱樂部で一風呂浴びてから御馳走になる、座には皿谷君と余の外に以前大阪毎日新聞に三年ばかりゐたことがあると云ふ慶應出身の平井君も居られる、酒の進むにつれて話は賑合ふ、女氣なしに斯うして離てなく御馳走になるのは愉快なもので思はず飲み過ぎて何う

やら足許も危なげに眼もドンヨリ曇りかけて來たので失敬して宿に歸る宿に歸つてから不思議に眼か冴えて寢つかれぬので書物賣る店に足を運んで見たが、讀むべき書物もないので白蓮女史の自白選歌集だけを求めて歸る、

白蓮に寄する

妍をほこる白蓮の君のいたくし

博多小女郎も嘲笑ひせむ

技さんと嘉南大圳工事

技さんは元總督府の勅任官、其の勅任官の椅子を去りて今度嘉南大圳組合の理事長さんになられた人、其の技さんを組合事務所を訪れる、久々振りの會見である、組合の事業としては今烏山で工事に着手してゐる堰堤を築いて大貯水池を作り、それを嘉南の雨を見ぬために耕作が出来ず不毛の地である土地に送水して之を立派な耕作地となすの大なる計畫だそうな、この堰堤工事と云ふは未だ日本に例を見ざる大工事で、其の衝に當る技術監督者たる責任の地位にあるのが即ち枝さんその人である、

枝さんの監督下に工事に取掛つてゐる烏山を視察すべく技術部員の阿部貞壽君に案内される、阿部さんは元土木局の技手で此の計畫

には初めから關係があり地質其他の調査に従事されたことがあり、そうした關係から此の事業を組合で經營するやうになつたので轉じて此處の技術部員になられたとのことである、途中先づ官田溪の架橋工事を見る橋の長さ四百廿尺巾二間半、之れが人道ともなれば水橋ともなる、工は既に半ばを過ぎてゐるやうに見受けられ橋上には軌道が設けられてあり烏山の堰堤工事に用ゆる粘土や砂利が人夫の手に依つて運搬されてゐる、

今此處に水橋架して水枯の

南のはてに送る眞清水

眞清水は水なき里に住む人の

命をつなぐ糧としぞ云ふ

窓外ならぬ組合經營の貨物列車に結びつけられたる箱車の窓から見れば平野漠々幾十里、其荒れ果てたる野に幾群かのヤギが吞氣そ
うに遊んでゐる、此の荒れ果てし土地も堰堤工事完成の上は立派な
田地になると云ふ、ゆられ／＼て工事場に着く、來て見れば荒野の
たゞ中に一臺二臺の機械が据付てあるばかりで何にが何やら少しも
分らぬ、説明を聞けばハハアンと頷かれる位のものだ、だが一目見
たばかりでも規模の大なるもの位の想像はつくが之れが枝さんの所
謂日本一の大工事かと聊か期待に背けるが如き感もある、で、阿部
さんに貯水池は何處になりますかと聞くと、之れから案内しますと

云つて小高き丘に導かれる、行くこと數丁にして眼下に廣い窪地が
ある、之れ即ち貯水池になる珊瑚潭である、けれども水が少しある
ばかりだから尙更らに日本一の要領が分らなくなる、云ふ迄もなく
素人たる我等には海のものとも山のものも益々判断がつかなくなる
芝生に腰を下ろして阿部さんの説明を聞く、

此の窪地の中に出島があり樹木の點々たるのが恰も珊瑚のそれに
似てゐると云ふので、前長官下村さんが此處を視察された時に珊瑚
潭と命名されたのです、成程下村さんは詩人である、此の出島の點
々たる態を珊瑚のそれに見られたのも面白い阿部さんの話は續く、
向に見ゆるが烏山嶺でアノ嶺を貫ひて遠く曾文溪の上流から溪水を

導き入れ、高さ百七十尺長さ六百五十尺の堰堤を築き此處に一大貯水池を作るのが組合の事業です、彼方に見ゆる森も工事完成後は水中に没し、向ふに見ゆる丘の處まで堰堤の流れになる、だから規模の大なる日本に其の例を見ない大袈裟のもので、即ち廣濶十五萬町歩に亘りて旱魃、排水不良の爲めに年々作物の收穫少なき土地又は絶對に不毛の地に適度の水を供給して收穫あらしめるやうになすのが主たる目的で、之を經濟的に見れば土地の價格が數倍に上るは勿論米も砂糖も一樣に收穫増加し嘉南の平野に不尠富を招來するようになるので督府も此の事業に壹千二百萬圓の支出を補助して工事の達成を急ぐと云ふ公共的の事業ですと、成程説明の如しとせば此の工

事完成後は寧ろ當局の豫想以上の結果を招來するであらう、さるにても斯かる大工事の發案者は何人か、矢張り夫れは山形前土木局長其の人である、山形さんは太つ腹の人、高雄の築港も電力會社も君の案なりと聞く、今や其等の工事は夫々着手されて何れも工半ばであるに此の人を督府より去らしめると云ふことは大なる損失であらねばならぬ、だが、事務長官式の賀來さんとは型に於て大變に異なるものがあるから長官に容れられず、山形さんも又現長官の下に局長たることを潔しとせず去りて民間の實業界に走つたものと思ふがそれその折合の如何は兎も角、如斯大工事を前に腕利きの山形さんを失ひしは何れよりするも遺憾此上ない、すまじきすのは官仕なり

と山形さんが臺灣を去るの時に泌み／＼思つたかどうか、其の發案者たる山形さんが居ないとせば、多少工事の前途が危まれぬでもない、扱て筆は横道に這入つたが所謂堰堤なるものの壽命は何年位のものでせうかと尋ねて見ると、先づ百年の壽命は保證つけられてますが其以上はと云はれる、サアそうなる和我等専門家ならざる門外漢には百年後の危険が案せられる、それは遠い將來のことではあるが不幸にして高さ百七十尺、長さ六百五十尺の堰堤が若し決潰するやうなことがあつたら何うする、其の時は幾多の生命と財産とが失はれると云ふ大慘事が出來する、で、若し百年後の何年目かに堤が決潰したと假定せば其時の慘害は非常なものですかと云へば、専門

家には何年経てば何うなるなどと云ふ事は考へても居ますまいとの返事、そんな事を考へたり豫想したりしては發明など出來るものではありません、學者はそれからと出來るものですかと阿部さんは平氣なもの、そう云はれるとそうかなアと云ふ氣にもなる、だが依然として決潰したときは何うなると云ふ懸念はコビリ付いて容易に失せない、不安にかられながら今度は左様に大工事なものが六年間位で完成しますかと聞けば、一年の日數を二百日許りに見積つてあるから之れも大丈夫と何を聞ひても至極呑氣な返事、事務所で晝の御馳走になり、いろ／＼の工事や設備などを視察して歸途に就く、けれども汽車に乗つても不安は不安を産み、取越苦勞の絶間

がない、技氏に行政官としての経験と手腕は認めるが此の道にかけ
ては我等同様素人の筈だ、それに昨日の話では大丈夫六年間には完
成する、其の時堰堤の壽命を聞き漏らしたが、完成後は斯くくだ
と云つて居られたやうに記憶する、技さんはもう素人の域を脱して
此道にかけても識者の一人になられたのか知らん、熟らく思ふま
でもなく、臺灣電力と此の大圳組合の工事とは此の島に於ける二大
事業であり、前者は既に算盤玉の桁を踏み外して天晴役人衆の設計
暴露の悲哀を現實に見せ工事費に壹千萬圓以上、理論馬力十三萬馬
力の電力の消化もオイソレと容易く消化されさうにも思はれない、
例は敢えて遠さに求むるの必要がない、何うか技さんの將來の爲め

(40)

に所期の効果あらんことを希望する。

技理事長に歌二首

平野漠々見渡すかぎり幾十里

水は流れて君か名語る

君か名を永久に傳へて潭水は

嘉南の平野流れてやます

(41)

堰提工事と八田技師

鳥山を視察した翌日、事務所で工事の責任者たる八田技師にお目

にかゝつたので早速昨日より不安でならなかつた工事の壽命百年説を持出して君の説明を聞く、と八田さんは妙な顔して壽命百年とはと反問される、そこで阿部君は斯う云はれるがと話すと同君言下にそれは阿部君の思違ひです、元來この堰堤と云ふものは工事中に危険があるもので完成後には絶對危険と云ふものがありませぬ我等が苦心するのはその工事半のことで、完成後一年も経てば堤全體は石よりも寧ろ堅くなるものです、其の理由は斯くの如きものでと詳細に亘りての説明で素人ながらも初めて安心が出来た、八田さんは督府部内に於ける土木工事にかけての權威者であり山形前長官の信任も厚かつた人だそうな、だが然かし工事たるやなかく、に大きく

(42)

て、此處が即ち八田技師の腕試しとも云ふべきであるから大事な上にも大事を取つて、近かく堰堤工事視察研究のために約六ヶ月の豫定で渡米することである、さもあるべきことだ。

堰堤に君が功殘すべく

百尺の塔建てばやと思ふ

東洋製糖の大賀さん

大賀さんを訪問したのは丁度枝さんに烏山行きを約束した其の日の朝であつたから會社に訪ねた時刻も非常に早やかつた、大賀さんは勿論會社に見えてゐなかつたので失禮とは思つたが烏山行の都合

(43)

もあるので電話で問合せるとスグに出掛けるとの返事、だが考へて見るとこんな早く訪問するのぢやなかつたにと後悔もされる、でも折角来た以上は仕方がない程なく大賀さんは見えた、早速朝つばらから押しかけて濟まないことを謝すると、氣輕に打消して何處かでお目に掛つたことが有るやうですと云はれる、そう云はれると此方でも初對面でないやうに思はれるが、扱て何處で御目に掛かりしことのありやなしやを思ひ浮べることが出来ぬ、此社の社長下阪さんは温和な人して又常務の田村さんも申分なき紳士その下阪さんにも田村さんにも日頃よく御目に掛つてゐるためにか大賀さんとも舊知の間柄であるかの感があり何んとなく親しみを覺える、

詰襟の服を無雜作に着込んだ少しも飾氣のない態度に親しみがあ
る、糖界不況の今日本社營業の全般を双肩に擔つてゐる君には人知
れぬ氣苦勞もまらう、然かし此の不景氣は君に取りての云はゞ試金
石である、折角自愛を望む。

高雄の知事さん

知事さんは應揚な人柄の持主で本島勅任官級での好男子である、
その男振りのよいのに今一人新元鐵道部長がある、二人ともに色男
の閣下を以て名高かい、蓋しその男振りの好い兩者に艶福のまりや
なしやは我等の知る處でない、扱てこの好男子富島知事を官舎に訪

問する知事さん曰く、此頃非常に多忙であつたので失敬した、御覽の通り築港も漸次進捗して數年を経ずして此港も見違えるやうに成りませう、一萬噸級の巨船が自由に横付されるとき此の灣内はマストの林を成し非常なる繁榮の地となるでせう、そうなると亦對外關係も従つて一層複雑になるばかりです、元來此地は支廳の所在地であつたのが州廳所在地になつたので他の州廳所在地に比して大分遅れてゐる處があるのと今一つは財源に乏しい、之は高雄發展上大なる障害の一つです、だが築港が出来れば南の方との交渉も繁くなり將來の高雄は本島第一の繁榮地となる事と思ひます、と憧れの眼を外に向ける、四五年もすれば此邊だつて空地がなくなり住宅難に惱

まされるやうになるかも知れませんが云々と將來の發展豫想談がなか／＼に盛んだ、

某夜港口官舎で知事さんの御馳走になつた時、盃を手にしながら聞く話の一節に、高雄の遊廓は向ふに見ゆる旗後と云ふ島にあつたのを枝君が臺南知事時代、土地繁榮策から今の新開地に移轉せしめたのであるが、それは百年の策ではなかつた、今にあの邊も住宅難の結果遊廓の立退を迫まるやうになります、矢張り遊廓は以前の様に旗後に一廓を成さしめた方がよろしい、成程御説の通り、一般人の住宅と遊廓とが隣りしてゐては風教上からしても宜敷ないのみならず、離れ小島の旗後を遊廓とせば遊治郎は否が應でも小舟を借

らなければならぬ、廓通ひは舟でするとは風流味があり情趣がある
之れは單に議論として、なく早速なんとかされては何うか。

常夏の國よし青葉さらによし

水の高雄は尙ほ更らによし

灯火を波にながめて酒を呼ぶ

港口官舎に十五夜の月

臺南の知事さん

此處には様々の由緒と舊蹟とがある、故北白川宮殿下の昔を偲ぶ
臺灣神社に到れば自づと襟を正ふせしむる昔のありし日を語るいろ

くの物があり、往時を追懐すれば感無慮、社司往時を語るに微に
して細、其の細に入るに従つて我等益々感深かきを覺ゆる、赤嵌樓
今は昔の面影を語るに過ぎざれ共之も此地名所の一つ、公園もそう
だ、公園は松木前廳長時代の計畫なりと聞く、誠に以て結構を極め
帝都日比谷公園も遠く及ばない、それその事蹟と名勝は兎まれ角ま
れ此の州は本島第一の廣さと量とを有するところ、従つて此州に長
たる人は夫れだけに人知れぬ苦心をするは勿論であると共に知事
中の腕利者であらねばならぬ、それは量と廣さに於て大であるだけ
問題も又多いからである、その全島樞要の州廳所在地に未だ地方長
官としては何等の經驗を有せざる督府一事務官だつた吉岡君を知事

として任命した時、人々は其の任命の突飛なるに意外の感を以て之を迎えたのである、だが、一事務官であつた吉岡君任に臺南知事の要職に就ても長官の期待に背かざるは勿論民間の人々も始めのほどは今度の長官、高が一事務官だ、事務官上りの彼に何程かの仕事が出来ると一様に侮つてゐたものだが、我吉岡君は素之れ非凡の傑物、それ地方長官としての経歴こそ彼は有せざれ、一州の長官位の仕事は彼に取りては寧ろ役不足の感があり、其の成すところ恰も快刀亂麻を斷つゝの概あり、人皆初めて凡ならざるの材たるを知り、今日では誰人もが彼は現代誠に得難き人物であると賞讃してゐるのも宜なる哉と云ふべしである。

君は氣骨凌々打てば憂然として響を發するの快傑、若夫れ此人をして戰國時代に在らしめなば、假令氏なくとも一國の城主となるべき人、平素督府の施政に就ても忌憚なき論評を成して督府に取りての一敵國たるかの觀ある臺灣新聞社の副社長宮島君は我等に吉岡君は總督にしても申分なき人、或は彼を總督たらしめなば田現總督よりも世人からは多くの期待を持つて迎えられるやも計られずと、然矣吉岡君は島界官吏中一際優れて見ゆる。

南のはてに眠れる此の巨人

浮世の風を心して聞け

日月潭と電力會社の工事

以前の二八水、今の二水此の驛前旅館に臺北の石炭商小松君と共に一夜の宿を借り翌朝七時發の列車で日月潭視察の途に就く、これから外車埕までは電力會社經營の汽車の便をかり、それから臺車に乗つて四時間弱炎天下を揺られ／＼て行く、臺車とは俗に云ふトロで土人が後押をしてレールの上を走るものである、それは手押であるか下り阪などになると速力も非常に早やく危険を感ぜられる位である、扱てこの臺車に乗つて山又山の間を縫つての旅行故四時間弱の旅程は左程の苦痛もなく反つて煤煙多き汽車旅行に優る、司馬按の建設部所在地に着いたのは二時頃、大越理事の室で一休みして勞れた足を工事場に運ぶ、

濁水溪から日月潭に水を引くには山又山を切り開かねばならぬ此の間五里の送水渠には隧道が十二もあると云ふ難工事、けれどもその難工事も豫定の計畫通りに進捗してゐるとは大越部長の直話である、明日姉妹ヶ原を視察すれば此の工事の如何に大規模であり難工事であると云ふことが分明するとの話であつたが小松君が臺北に急ぎの用事があると云ふので遺憾乍ら姉妹ヶ原其他の工事場視察を見合せ、今宵は日月潭に舟を浮べて蕃女がほこりの砧を聞き、明日は臺中に行きたいからとて其の厚意を謝して別れ、豫ねて撞れの日月潭に舟を浮べるべく司馬按より水社に通ずる山路を辿る、登り盡せば紺青の碧潭眼下に見え、湖畔に至れば既にモータボートが用意され

てあるボートは静かに湖上を迂る、湖水の周囲は鬱蒼たる深林、この深山がくれに周圍四里もある湖水があらうとはホンに及びもつかぬことである、迂るボートは蕃人部落に近づく、かねてから話があつたものか但しは舟が着くのは御客と決まつてゐるからか部落からは出迎の男がやつて来る、案内されて行くと程なく年頃の女や五十を過ぎた女達が七人、各々杵を手にして石臼の周に集まるやかで手にせる杵にて石臼を叩けば微妙なる音律が出る、その音につれて蕃歌が合唱され、それが云ひやうない哀調である多情多感ならぬ我等と雖此の調べが胸奥の琴線を刺激して旅愁の感を彌が上にも深からしむる、蕃人も近頃は石臼を叩くことが稍々職業化し、それがため

に日本の俗歌を歌ふやうになつたとかで今宵も日本の俗歌を器用な節廻しで聞かせてくれたが此處に来てこの調べを聞く時日本の俗歌は興を殺く事夥しい、砧の音は近かきにありて聞くよりも舟を湖上に浮べて聞く方が數段と妙味がある、けれども夫れは聞く人々に依つての相違はあらう、

此の日荒木技手の好意にて黄昏の湖上静かに舟を方りつゝ、憧れの砧と蕃女がほこりの蕃歌なるものを心ゆくまでに聞くことが出来たのは我等に於ては終生忘れられざる思出の種子である。

砧聞く湖上静かにたそがれて

東の空の暮はるゝ哉

釣橋を越えて彼方の里に往く

此處は蕃界猿群れ遊ぶ

此の夕べ水社の里に宿かれば

鳥の鳴く音に夜は明け初めぬ

進退谷まれる林猷堂

林君は臺中に於ける本島人中の名士、だか近頃調子に乗りすぎて臺灣議會設置運動を中央政府に持出し二三代議士の紹介で提出したが其の理由あまりに薄弱なるが故に林君遙々上京しての運動も何等の功を奏せず、葬られた、此の運動は過ぐる議會にも試みられたが

誰も相手にせず、隔れ小島の臺灣なればこそ名望家と云ふ意味に於て督府からも優遇され又他よりも相當の敬意を表されるのだが、中央では誰だつて君の存在を認めない、従つて君の説に耳を借すの名士がない、一體議會設置運動を試みるなどあまりに目先きが利かなすぎると同時にあまりに自惚が強いと云ふものだ、

頃者臺灣の思想界漸やく悪化せんとするの傾向がありわけて臺中が其の中心地たるかの觀がある、卿等過去を振り返つて見たらば今日以上に彼是れ云ふのは恰も一人息子が親に對して駄々ると同然卿等は總督府より非常に恵まれてゐる一人だその恵に増長して一部人士の尻馬に乗つて騒ぐなどは身の程を知らぬにも程がある、君は

乗り出したからには向岸まで着くかそれとも途中で覆へるか何れにせよ乗り出したからには元出し岸に歸る譯には行かぬ破目に陥入つてゐるだらう、然かし賢明な君には議會設置運動の是非位のこととは分つてゐる筈だ然るに尙も運動を繼續すると云ふのは即ち進退兩難の破目にあるからだ、我等は君の此の運動を成すと云ふことを聞いた時林君も近頃何うかしてゐるのぢやないかと思つた、若夫君に自己の立場を維持し、且つ將來に於ける面目を保たんと欲するならば須らく臺中知事に自己の不明を謝すると同時に救を求めより外に策はない、然らずんば君の將來には多くの難儀が横はつて遂には動きの取れぬ苦境に突落される運命にある好漢遂に天下の形勢を見る

(58)

明がなかつたと云はねばならぬ。

臺中の立川知事

林君の運動と臺中の知事さんとを結びつけて考へるとき立川さんはどんな人物だらう、本來ならば林君がこんな運動を思立つときに知事さんは其の不心得なるを戒めねばならぬ、知事さんは此の問題を何う見てゐられるのか逢つて所見が聞きたいと一日縣廳知事公室を訪れて早速林君の問題に就ての所見を聞く、知事さん語るらく、そうですアノ問題は私としては決して無關心ではなかつた、それに林君が臺中の人なので尙更らに注意を怠らず、これに對して如何な

(59)

る處置を取るべきかについて總督にも長官にも御聞きして見たが、
まア暫らく彼の行動と問題の成行を見て、後に方法を講じても遅く
はあるまいとの御意見であつたから、私としては總督長官の命に従
ひ何等の干渉も加へませんでした。が林君もあんな運動を成すなんて
實に馬鹿けた話です、然矣斯くの如き運動を試みる彼は下らぬもの
であるが一面此の運動は臺灣に於ける本島人には強き刺激を與へた
ことは確實だ、見よ此運動が因となつて本島青年の思想には著しき
變化を來たし、工業學校に於ける生徒のスイライキ師範學校に於け
る巡查に對する侮辱問題なども要するに青年思想惡化を物語るもの
である、我等は嘗つて下村前長官に林献堂の將來は當局として注意

(60)

するの必要あるべきを説いたことがあつたが、果せる哉、其れが數
年後の今日に於て事實となつて顯はれたのを遺憾とするものであ
る、假令林君の運動其のものは實現されずとするも之れが因となり
て思想惡化するの虞はないか、任に思想惡化の源泉地とも云ふべき
臺中に長官たる人は此の思想の流に深甚の注意を拂はねばならぬ、
幸に我立川さんは此事につきては細心の注意をしてゐるとのことであ
つたから我等も安堵して知事公室を引き下がつた。

(61)

臺灣新聞副社長宮島君

君は臺灣新聞社の副社長である、我等が同君を訪問したのは同君

が主宰する新聞紙が我等に關して失敗な記事を掲載したから其れを詰責するべく訪問したのであつた、逢つて見ると温厚な君子で本島人を善きに導くべく日常其れに腐心し、成るべく本島人と接する機會を作るべく努力してゐるとのことであつた、

此の人よりこの言を聞く我等は非常に心嬉しく且つ意を強ふしたのである、夫れ本島人を善導せんと欲せば先づ宮島君の言ふが如く本島人と出来るだけ接觸するの機會を多く作らねばならぬ、その偏見からいゝの誤解が生じ問題も起るのだがら一度よりも二度、二度よりも三度と云ふやうに接見してゐると知らずの間に御互の心持ちが分かつて來て眞の融和が出来るると云ふものである。

高砂の島に安けく眠むる子を

起きよと呼ぶは反逆の友

高砂の島にあやしき雲ありて

下界の相の亂れほの見ゆ

歌二首を呈して君への別辭となす

林 熊 徴 君

林君は本島切つての名望家で年は若い財界の大立物、されば一時財界の好況時代はいろ／＼の會社にも關係して天晴れなる事業家振りを見せてゐたが、近頃吹き捲くる不況の嵐に痛められ現在では

昔日の倅なく聊か狐影悄然として意氣昂らざるの憾みはあるけれど年は若かいし加ふるに名望家であるから、同君を窮地に陥入れるが如きは督府としても又臺銀としても出来まいから自重が何よりの肝要である、林君も浮世の嵐に吹かれることがあまりになくこれまで谷間の杉のその如くに荒い風にもあたらす育つて来たのだから、この財界不況の嵐は君に好き教訓を與へたと云ふべしである、前途は遠い、急げば廻はれだまア一段く〜と踏みぬめて行くが萬全の策ではあるまいか。

風流部長さん

鐵道部長新元さんは貴族的タイプの持主で肌障りの好い人である臺灣開發のためにはセツセと鐵道網を張るべく努力されたが故に今日の臺灣は交通も内地人の想像以上に開けてゐる、部長さんは時々爆發藥の香を嗅がないとなんだかこう物忘れでもしたやうな氣持ちがするやうな、爆發藥は即ち鐵道工事に山や崖を切り開くべく用ひるものたるとは云はずもかなである、それだけ新元さんの頭には鐵道と云ふ事がゴビリ付いてゐる、元來技術官育ちの部長さん、それほど執着あるは蓋し無理からざると云はねばならぬ、こんな部長さんあるか故に鐵道も漸次延長されつつあるのであるから本島在住者は感謝狀位は呈して然るべきである、さてこ

の部長さん鐵道の事ばかりを考へてゐるかと云へば風流の道にも親しみが有り、その三十一文字は既に今日一家を成してゐて前下村長官去りての今日島界に於ける斯道の第一人者であるとのことである、我等はこの風流部長さんの前途に幸あれかしと祈るものである。

臺灣製糖の山本君

君は中央政界で押しも押されもせぬ男一匹、過ぐる政友會内閣の改造が首尾よく出来たら天晴れ大臣の君となる處であつたのを憎くや元田、中橋の兩君が頑張つたばかりに目の先にブラ下かつた大臣の椅子に据はれなかつたのだから定めし其の時は元田中橋の兩君

を怨んだ事だらう、扱此の人の製糖會社本社は高雄にあつたが、先年高雄か州廳所在地となるや知事の御膝下では何にかけつけて事面倒と思つたのか但しは他に移轉せねばならぬ重大な理由ありてか其の真相の如何は素より我等の聞知せざる所なれども兎も角不便な屏東に本社を移轉したのである、されば口善惡なき童共が山本の奴さん高雄に本社を置いては廳から何にかにつけて寄附金を仰付けられるので逃げ出したのだと失敬な陰口を利くものがある、と同時に近頃中央政界でメキ／＼男振りを上げたが故に督府の高官を馬鹿にする、そんな風があるから會社の使用人までが虎の威をかる狐よろしく我等を馬鹿にするのだとフンガイする督府の役人も居る、折角天

下の山本と云はれるやうになつた今日外を顧みるの要もあらう、世の中のことはオレガオレガばかりでは通されぬから。

臺北の知事と内務部長

知事さんは司法官出身の人今までは萬事が冷たい法律一點張りで世を渡られた人、されば七面倒な用が多い知事の職は定めし煩さいことであらう、それに臺北は督府の所在地でもあるので並々ならぬ煩はしさがあらうだが情弊あるところに良治なしで司法官上かりの知事さんの方が情弊の伴ふが如きことなく反つて治蹟の見るべきものがあるに相違ないところ頭に書きながら訪問する、

(63)

成程司法官出身の人だけに、此の人の面上牢固として抜くべからざる信念あるを偲ばしむる知事さん曰く、臺灣人に處するの法は慎重考慮した上でなければならぬ、共學制もよし自治制もよし、されどそれは急進主義よりも漸進主義でなければならぬ、と此の言大に味ふべきものがあり意味なかくに深長だ、我等はこの一言を聞き、て心強く思ふものである、知事さんの性格は此の一語で窺はるゝ。

田阪君は元殖産局の課長であつたが今では臺北廳の内務部長として知事を扶け又督府部内に於ける花形役者として將來を囑目されてゐる、知事さんの堅苦しさとは反對に至極碎けた人されば民間との接衝には最も掛り役と云はねばならぬ知事さんには好い女房役と云

(69)

ふべしである。

顔 雲 年 君

基隆御殿の主人公として時めきし木村久太郎氏の御殿を譲り受け石炭王として其名島界に高かく戦時成金の筆頭で、其の昔は巡査補であつたそうだが元來機を見るに敏なる君は早やくも島内の鑛山に目をつけ、先づ金瓜石の金山を手に入れ續いて木村久太郎君と共に石炭の採掘を初めたのであつた、それがかの歐洲戦亂勃發から急に事業界が活氣立つて來たので其の潮流に乗り上げて悠ちの間に數千萬の富を成したのである、斯くて飽迄も好運な彼は未だ財界の好

(70)

況時代三井と提携して自己所有鑛山を基隆炭礦會社に譲渡したのであつた、勿論三井に賣付けた時莫大なる金を手にしたのである、で、財界不況の今日と雖相手は日本の三井だ、貧乏ゆるぎもしない、今日顔君が基隆御殿に納まつて悠々迫まらざるの態度を持して納まつてゐるのも要之君に先見の明ありしか故に外ならぬのである。

附記

此の稿の切後快傑顔君は不幸病に斃たのである、惜しい人物を島内の實業界から失つたものだ、

(71)

臺灣での成功者の誰れ彼れ

その昔、領臺當時裸一貫若くは腰辯で臺灣に渡り今日では相當の富を成してゐる者にいろ／＼人がある、そのいろ／＼の人の中に於て代表的人物三四の人を失敬する。

阪本素魯哉君

君は一國の選良議會に出でては僅かに議席に其の姿を見せる位で誰れしもその存在を認めないけれども、往年憲政會に其人ありと知られた濱口雄幸君と選舉を争つて失敗したと云ふ歴史を持つてゐるので名前だけは他の陣笠に比して比較的知られてゐる、そうして一つは銀行の専務で相當に舊財があると云ふ意味で、だが素魯哉君

は失敬だが政治家と云ふ柄の人ではないらしい、矢張り臺灣下りまで出かけて一代に相當の富を成しただけあつて可なりに錢を愛する人のやうだから寧ろ來る十三年春の總選舉には二度と野心を起さず實業界に終始すると云ふ心掛けに立戻つたか好い、でないと折角暑つい臺灣で貯めたお金も次第に消え行くの虞れなきにしもあらずだ所詮他人の研究になる石油政策案を所屬が政友會だからと云つて依頼されるが儘に自己研究になるかの如き装をして議會に提案するなどとはあまりに陣笠主義を發揮して寧ろ悲哀を感じる、我等は終生一陣笠として議席に居らんよりは前代議士の肩書も出來たし對社會的に所謂名士の折紙もついたので來年の選舉は之れを後進に

譲り財界で踏ん返り返つた方が、反つて代議士を續けるよりも君の貫録を益す所以ではあるまいかと思ふ、でも總務の一票も一陣笠の一票も、一票に代はりがないと云ふのならそれまでの話だが。

古賀三千人君

君も臺灣での成功者で阪本君と同じく國家の選良であるアノ天神髯を生やしてゐる處などは立派な政客のタイプ、近頃では金が物言ふ社會だからか否かは我等の知らざるところだが兎も角準幹部格を以て待遇され、本人も又多少の油が乗りかけてゐる様に見受けられる、けれども君にして向後政治家として終始するの心掛けがあるな

らば層一層の勉強と修養とを要する今日でこそ憲政會員なるが故に政友會内閣の當時にありては、政府の奴等かと其の所謂施政方針なるものにつきては彼是の批判をしてゐたやうだ、だが、今は以前君が立候補を思立つた時は實は政友會から打つて出る筈で宣言書も其の積りで作つたのが政友會の候補としては地盤の割宛がつかない、そこで折角出來た宣言書も今度は政友會反對に書き直して憲政會候補になつたと云ふ日もある人、此の人から現政府の施政方針などと聞かされるとき我等は噫々代議士と云ふものも身勝手なものだと苦笑禁じ得ざるものがある、然かしそれは三千人さんには何等のかゝはりもない事で、要は衆議院議員の肩書が所有さるればそれでよ

よいのであらう、だが君も兎も角今日に於ては憲政會の幹部格、折角自重して政治學の研究でもなさるがよろしい、待てば海路の日和だ、影薄き憲政會にも風の吹き廻はし如何に依つては、内閣が取れぬものとも限らないから。

赤司初太郎君

日給五十錢の鐵道工夫時代もあり或時は蕃界深く分け入りて小料理家の主人公にもなつた、赤司君は今では東京麴町の高臺に相當の家屋敷やぶを買入れ自動車自動車を飛ばして東都一流の實業家を相手にいろ／＼の事業を經營する身分である、尤も現在に於ては彼が關係せる

(76)

諸事業も振はないけれど、取り組める相手が何んと云つても財界一流どころなので此の不況時に乗り上げて左程までのボロも出さずにやつてゐる處に君の凡ならざるを知ることが出来る、君も所謂成上がりももの一人であり、赤司が近頃政治や經濟の事などに就ても相當に話をするやうになつたから不思議だと、失敬な陰口を云ふものもあるが、彼、元來度膽のある男だから財界不況の瀬戸際に立つてもピクともしない、其處に彼の強味があり將來がある、總じて臺灣で成功した誰彼共が中央に乗り出して腕を縦横に振はんずものと勢込んで事業の中心地東京に乗込むが、さて來て見れば臺灣とは大に勝手が違ふ、で折角暑つい臺灣で貯めたお金も忽ちにしして無く

(77)

して終ふと云ふのが多くの人に見る處だが我赤司君は寧ろ臺灣に於けるよりもヨリ以上その活躍振りに花々しきものがある、三浦岬にドンと打つ波は可愛い男の度胸試しと、女でさへ少しや度胸のある人と云ふぢやないか、君が今日の地位を保つてゐるのもこの糞度胸があるからであらう、君は常に自分は何時までも未製品でありたいと云ふ、然かり我等は君の如き未製品でありたいと云ふ人を尊敬する。

(78)

數田輝太郎さん

此人相當に苦勞した人、けれども今日では鹽水港製糖會社の常務

取締役として、將來は同社々長の唯一候補として自他共に許してゐる、楨氏が東京の出張所に藤崎君と云ふ立派な常務があるのに本社の方は近頃重役になつたばかりの若かい皿谷君に任せて、數田君を東京詰めにしたのには其の裏面に畫ける或物がなくては成らぬ、君を東京に詰めにした楨さんの腹の中を割つて見ると社長の椅子を譲るに先ち、君を東京の實業家や銀行家に紹介して其の人物を知らしめて置くの必要がある、で、先輩藤崎君が在任してゐるに拘らず君を呼び寄せて置くものであると云ふとは最早一點の疑もなき處だ、茲に於てか君は楨さんの知遇に感ずると共に楨さん無き後の鹽水港をして益々發展擴大せしめねばならぬ、元來、君は頭腦明析の人だ

(79)

から其の社長となりて采配を振るの時、必ずや其處に鮮やかなる活躍振りと腕の冴とを見せるであらう。

木村匡さん

君は故乃木將軍嘗つて此の臺灣に總督たりし時の秘書官であつたされば朝夕故將軍に接近してゐたので自然其の風格に感化されるところがあつたやうに思はれる、君は今島界に於ける人格者として臺灣銀行に亞ぐ銀行の頭取として、而かして一面馬を愛すると云ふ人として其名を知らぬ人はない位だ、筆者亦君の名を聞くこと久し、けれども今日まで相見るの機會を得なかつたが、今度機會があつて

二三度會見し、そして東京の同行支店に於てもたび／＼面會したので稍々君の片鱗だけは知ることが出来たやうにも思はれる、筆者臺灣にて君の私宅を訪問せる時、馬に關するいろ／＼の物を見せられて其の馬に因めるいろ／＼のものを集めてゐられるに驚かされた、凡そ好きと云つても此處まで熱心な人も多くはあるまい、

此の熱心が即ち君の總べての點に及ぶと云ふ様なもので頭取である銀行の方の經營にも此の熱心さがあり亦乗馬の方に於ても此の熱心さがあるので偶々落馬してシタタカ腰のあたりを打つても勇氣を鼓して毎朝乗馬の稽古を成すと云ふ熱心さがある、要するに君が今日の位置に在るのも此の熱あるが故ではあるまいか。

後宮信太郎さん

君は島界に於ける實業家中の新人に數ふべき人、關係會社の多くが今悲境にあるので其の氣苦勞も並大抵のことではあるまいが中川小十郎氏が臺銀頭取として任に在る間は先づ親船に乗つた積りで居て好からう、だが君が今日あるの所以は中川頭取の知遇宜敷を得しがためであつて見れば此の際中川氏の知遇に酬ゆるの意味に於ても一日も早やく事業の整理を完成するの義務はある、だが一面から考へて見ると一時好景氣に乗り上げ九天直下不況のドン底に迄り落ちたのは君に於ては何よりの試練ではあるまいか、君は春秋に富む

(82)

されば君にして所謂波瀾は人の活かすの寸法を以て、或は高かく或は低きく變轉するのは君の將來を大ならしむるの所以かも知れぬ、我等は此の意味に於て君の將來を矚目するものである。

思はぬお客

今日は朝から氣持が悪るい、されば人を尋ねるのも嫌やだしさればと云つて歌作る氣にもなれない、それに冬二月外は内地にて見る五月雨のやうなシトとくした雨が降つてゐる、扱て今日の一日を何うして送つたものかと思煩らつてゐるところに突然の來客、それはほんとうに思もかけぬ柳原君であつた、君は二三年前からの知己

(83)

臺灣に支店があると云ふことは勿論我等も承知して居たが、今日此處で偶然に巡り逢ふとは思ひも寄らなかつた、先づ何うして知れましたかと聞くと、帝國製糖の牧山さんを訪ねた時、玄關先きでチラリと見た姿が似てゐたのでと、成程そう云はれると我等も亦玄關先きで見かけたやうな氣もする、マア何れにしても久瀨でしたとそれから話は君が今の藤椅子會社を創立せんとして奔走しつゝあつた當時のことから始まつてそれからと話に枝葉がつく、時に柳原君の曰く、船中で知り合になつた男に瀬戸山と云ふ人がある、此の人頗元氣者、是非紹介したいがとの話、差支ない旨を返事すると氣の早やい柳原君はもう中腰になつて出かける用意をする、去つて十五

分と經たないのに、瀬戸山さんを連れて來る、五十がらみの見るからに頑健にして豪傑風の人だ、生れは九州大分縣、そして我等が同郷の先輩として仰ぐ安場閣下とは非常に心安くしてゐられる現に今度なども安場さんの令息が會社の用事で見えたから其の案内係を承はつてゐますタイと九州辯も一入に親しみがある、

三人ヨセ鍋を取らせて盃を交はす、午後から雨も晴れたので士林の農場見物に出かける、

農場にはいろ／＼の熱帯植物が植えられてあつた、主任の某さんが説明して下さる、見るもの聞くもの總べてが珍らしきものばかり場内を左に右に案内されて見聞を廣め主任に厚つく禮して歸路につ

く既に黄昏時。

支那料理

宿に歸つから柳原君に誘はれて支那料理屋に行く、料亭の名は今記憶に存しないが、近頃出来た評判の家だそう、料理が持出されてから柳原君の奥さんも見えた、支那は料理に於て世界第一だそう、な味へば料理のいろいろのものが美味である、料理の美味誠に結構だが、其れよりも一つ鉢の中に盛られてあるのを各自が箸を突込んで喰べるのにも心安すだてなれば親しみがある、我等は寧ろ支那料理の美味よりもこの親しみあるを喜ぶものである、會談久ふして宿

(86)

につたのは夜も更けて十二時を過ぎてゐた、

南國情調

芭蕉實が到る處の畑に重そうに垂れ下がつてゐる、椰子がある、檳榔樹がある、誰れなん人が命名したのか南國に相應しき名も艶にやさしき想思樹の並木がある、その並木の中を水牛追ふ可憐な子供の幾人かが通る、其れは眞に繪よりも美しく立派な藝術である、交通の不便なところには臺車と云ふのもあれば、轎もある、と云ふ様に未だ開けぬ南國には又南國特有ないろいろのものがあつた、我等縁なくして轎に乗るの機を得なかつたが臺車なるものには幾度となく

(87)

乗せられた、此の臺車は非文明式のやうだが、悪い石炭を使用する汽車の便をかりるよりも臺車旅行の方が反つて詩的で氣持ちが好い、それは想思樹の並木を過ぎれば芭蕉葉繁る畑續きに出ると云ふ情調やら、深山の中の溪川の流れに沿ふて走る時などは何んとも云へぬ情調が湧く、斯かる情景は交通不便なる地に臺車を假るの時初めて味はれる南國情調の一つだが、臺北新公園のライオンと云ふレストランでエプロン姿の若かい女を見ると、臺車で旅行する時よりも或は色々の土地特有の物を見せられる時よりも、南國情調が濃やかである、かの騒々しい樂器の音を聞きつて焼きつくが如き烈日を避けて冷えたビールに一沫の涼を入れる時、我等には何んとも云

へぬ情趣に浸ることが出来る、成程エプロン姿の女は烈日赫々として照り地上には名も知らぬ熱帶的植物の繁る土地にて見る時に、眞に其のエプロン姿の美を見出すことが出来る、我等はこの熱帶性植物が周圍に繁げつてゐるライオンの食堂で強烈なる酒を口にするときエプロンの美も認めれば、南國氣分も味ふ事が出来る斯うした氣分に心行くまで浸つてゐる時、フト思出すのは東京に於けるカフェーのエプロン姿だ、南國に居て内地のエプロン姿を想像すると、我等には其の姿を滑稽に、且つ醜惡に思はれてならぬ。

紅の花ふみしたき冬の日を

水牛追ふ兒の面にくき哉

生蕃人

今でも蕃地深く踏み入ると人の首を無断で失敬する蕃人の群が居て時折り行人を悩ますこともあるそうだが、来て見れば内地で思つたよりはより以上に文化の程度が進んでゐるのに驚いた、今は昔し角板山の生蕃と來たら非常に手強いものであつたそうだが今では之等蕃人も夫々の業務に従事し子弟を蕃童教務所に入れてゐる、蕃童の教育は總じて現在では巡查に依て成されてゐるが成績は極めて良好であるとのことである、彼等元來水草の民で氣まぐれの生活を營み、氣に向けば一つ處に何時までも居住し氣が變れば瓢然として

(90)

深山に分け入るのだそうな。

蕃人と首

彼等が人の首を欲しがるのは一つは彼等の性格の然らしむる處にも依ると思はれるが、一つは迷信から來たものと思はれる、蕃人と首のことにつきてはいろ／＼と説をなすものがあるけれども、其の何れを信するかに苦しむ、按ずるに人の首は彼等に於ては何よりも大切なものらしい。

(91)

譬へば娘を嫁にやる親が、あの家には財産は無いが首が多くあると云つては嫁入の時の條件になるなど我等に及びもつかぬものがある

る、此の危険にして厄介極まる蕃人も年と共に其の數を減じつゝあるとは何よりのことである、

平山さんと事業

君は拓殖製茶會社の専務、臺灣は茶の産地、その名産茶の改良も計れば統一をも期すると云ふ遠大なる意味に於て前長官下村さんの時代に資本金三百萬圓の製茶會社を設立さしたのであつた、君は嘗て代議士たりし時議會に於て低聲ながらも綿々として盡きざる演説を試みると云ふ意味に於て其名を知られし人、今は政治界を去り馬越恭平を社長にセスセと事業に専念、支那笠を冠つて焼き付くが如

き炎天下を巡視される、斯うした君の熱心は難事業視せられし製茶事業も着々として成績を挙げ、政界より實業界に轉せし君の將來には本島在住の實業家も興味を持ち其の評判も至極よろしい方で、此の茶會社を一つの踏臺として各種の事業を計畫し、往年我等が渡臺せる時は新進ならぬ新進の實業家として相當の羽振りを利用せ、それに長官の下村さんとは遞信省時代から深かき因縁があるのも其の一つで對社會的評判もよろしく計畫された三百萬圓の高砂製糖も會社萬能時代の時として之れ又旬日ならずして滿株となると云ふやうに、渡臺以來日は淺かつたが一步一步と踏みめつゝ發展されてゐたが、其れも東の間で財界不況の嵐に吹き捲くられて今では關係

事業の何れもか誠に慘憺たるの状況にあるらしい、其の主とする茶の方は取引先である露國が現状の如しであるから以て知るべしである、だが日露通商の事も聊かの曙光を見出された今日、此日露交渉さへ首尾好く梟がつけば會社も一息平山さんも亦一息と云ふ處である、さるにても我等は切に君の健在を祈る、

(94)

田總督に一言を呈す

我等は爰に臺灣を視察しての感想録を記して田總督への別離の辭とする、

閣下任に臺灣總督に就て年あり、其の赴任するや程なく文官が劍をブラ下げてゐるのが面白くないのみならず反つて臺灣人の感情を害すると云ふ意味に於て文官の佩劍を廢したのは之を機宜の處置と云ふべく、而して全島を視察して歸府するや、島内文化の程度著しきものあるを觀取してか自治制を布き、續いて前長官下村さんが教育の普及に務めた結果、教育方面も總督の豫想以上に進歩してゐたので此の點は下村さんと同意見であつたのか、就任以來教育の普及を圖るにも最も熱心であつた、其れかあらぬか今日では内臺人の共學制も設けられてあるやうに記憶する、此の内臺人共學制につきてはいろ／＼の反對を成すものもあるやに聞き及ぶが其處は總督の威光で之れも施行と決定したのなるべし、斯く田さんは文官總督とし

(95)

て善政を布くべく諸有方面にベストを盡され、文官總督として武官總督時代よりも面目大に一新せる善政を施すべく務められたので本島人間には現總督の評判も従つて悪るくない、だが我等第三者たる立場から、田さんの施政方針なるものを具さに研究するとき、我等は不幸にして彼の施政方針の全部を謳歌するを得ざるを嘆しみとする、

成程武官總督時代に在りては警察萬能の非難もあつた、文官の帶劍は徒らに本島人の反感を買ふばかりにて何等の功なしと云ふ非難もあつた、領臺以來既に久しされば我等を遇するの道を講ずべしとの本島人の叫びもあつた、法律は我等には内地人同様の自由と權利

を與へないではないかとの叫びを成すものもあつた、けれども武官總督時代に於ては其等の非難も叫びも未だ時機尙早なりとして容れられなかつた、然るに時代の變遷は遂に武官總督に代ゆるに文官總督を以てすると云ふやうに一變した、

我國に於ける最初の文官總督である、男爵田閣下は意氣揚々に、武官總督の之れまで成し能はざりし處を成し遂げ、然り而して我國最初の文官總督としての面目を保ち、且つは價值あらしめねばならぬと云ふ意氣込で、赴任されたことであらう、かるが故に我文官總督田さんは、着任後日淺きに前武官總督時代に比して其の行方に非常なる相違があつた、但し此の行方は悉く是であつたか、靜かに其の

行方を觀察すると田さんとしては如何にも急進主義の處がある

たとへば共學制の如き、自治制の如き、若くは商法や民法の施行問題の如き、或は州廳所在地の決定の如き、餘りに功を一舉にするの觀ありしが如くに思はれる、

我等は敢て田さんの施政なるものに就て彼是の評を欲しないけれども、共學制にもせよ、自治制にせよ、州廳所在地を決定するにせよ、今少しく熟慮考究するの餘地はなかつたのかと云ふのである、云ふまでもなく一度び法律と成て現はれし以上、朝令暮改も總督としての權威に顧みても出来まい、田さん今にして靜思するとき就任以來施し來たりし諸問題の悉くを時代に適合せるものなりと認めら

とるゝや否や、

我等思ふに自治制の如き、先づ臺北、臺中、臺南の州廳所在地に試み、自治制とは斯くの如きものであると云ふことを本島人に知らしめ、然る後に全島に及ぶと云ふ段取にしたならば當局も民人も共に戸惑せずによく了解して實蹟も又舉かりはせなかつたかと思ふ、然るに此事あらずして全島を殆んど汽車旅行的に表面のみを觀察し直ちに以て自治制を施せるが故に、其の當時に於ては何が何やら一向に分らず當局も大に骨を折つとかに聞き及ぶ、さもあるべきことである、

如斯、田さん就任後、前任者までは其事なかりしものを、田さんの

時代になつてから之れも與へる、それも與へると云ふ主義に出でたので本島人も流石に面喰らつたに違ひない、それと同時に今までは荒蕪の上に座はらせられてゐたものが、九天から直下する様に眞綿入りの布團に座はらせられたので、急に座はり心地が好くなつて駄々る様な傾向にもなつて來た、即ち、近頃本島人が非常に生意氣になり、わけても學生が最も生意氣になつて來たのは事實が雄辯に保證してゐる、古賢は實に意味深長な事を云つてゐる「急げば廻はれ」と、田さんも先づ急がんよりも廻はれで、沈思熟慮するの要はなかつたか、それも田さんが何時まででも總督であり得るならば、所謂自ら蒔きしものは自ら刈取ると云ふこともあるけれども、寸善尺魔

やらで人の運命と云ふものは一寸先の事さへ何うなるものやら人間には分らない、

要するに田總督はあまりに短時日の間に於て、多くの仕事を成し遂げんとして事を急げるの傾向がある、幸に龜裂の生せざらんとを終りに臨みて希望して置く。

吹くな嵐よ

往くときは静かな航海であつたが、歸りには大分荒れて基隆を出てから二日目の晩など最も荒れかたが烈しかつた、積み重ねた荷物は算を亂して轉がり落ちる、船に弱はき連中は寢臺に寝たざり頭が上

からないイヤモウ慘憺たるものであつた、けれども風神なか／＼怒りを沈めず、波は上甲板を洗ふが如き凄じさでもしや此儘船が怒濤の中に呑まれはせぬか、若し左様の事でもあつたら何うする、子は親を失ひ、親は子を失ふの惨又惨を極めるに至る、風伯夫れ怒を沈めよと念ずるは蓋し我等一人のみでなく乗客の總べてが思は同じであらう、斯かる間にも船は進行を續けて不安裡に夜となる、夜に入ると共に不安は益々募るばかりであるが扱て船の上であつて見れば致方なく六千噸の船と運命を共にするまでのことだ、泣いても笑つても沈むものなら沈む、さう諦めると反つて安心である、ボーイに酒を命じて高鳴る怒濤も船體傾くも餘所に悠々として一本又一本と

平げてゐると酔が段々廻はつて來て鞆々と鳴る浪の音も微妙な音樂の其を聞くが如くに思はれる、酒は百藥の長なりとは誰が云つたものだか、此言誠に至言である、ソロ／＼眠氣を催して來たので、ベツトに横はると、何時の間にか荒波も忘れたやうに華胥の夢路に入る、四邊のざわめきに起された時は既に朝も七時を過ぎ昨日來の暴風雨は何處を吹いてゐるのやら、天晴れて波穏やかである、即ち大風一過して天氣晴朗空に雲影を見すと云ふ形だ、されば昨夜までは何うなることかと青ざめてゐた乗客の誰も彼もが命拾をしたやうに喜び勇むでゐる、即ち我はそのざわめきに起されたのであつた。

碁を圍む人の心持

今朝は食堂も非常に賑やかで、臺中病院の某さんも臺北の人で碁が上手な人も、臺灣新聞社の主筆であつたが今度大阪毎日新聞の事業部に入ると云ふ某君も、東洋製糖會社の某と云ふ人も皆一様に元氣で食堂は例に依つて碁が初まる、

醫者の某さんは我等より一目ばかりは上手、けれども一目置いて戦を成すと云ふとは潔しとせざるところ、その一目位上手らしいやうに思はれる某さんと、敗けたものがビール半打だけを投げ出すと云ふ事にて戦を初める、勿論醫者の某さんに八分の勝目がある、碁

(104)

の上手な臺北の人はお醫者さんに勝味があると云ふ意味からビール三本をかける、大阪毎日に入ると云ふ某君は我等にかける、やがて石は一つ二つと置かれ、盤上の戦は石を置くにつれて千變萬化する、その千變萬化する戦の結果は如何と云ふに、思ひがけずも勝は我等に依つて占められたので、都合ビール九本が並んだと云ふ譯、此の思はざる番狂せに毎日子は小踊して喜ぶ、敗れたが故にビール三本を取られた碁の上手な男が盛んに奮慨する、だから碁はやめられぬと我等の鼻は益々高くなり祝杯高かく擧げられ食堂は彌が上にも賑合を呈するのであつた。

(105)

船内に於ける餘興

今宵一夜で明日は神戸上陸、長がいと思つた航海も、船で寝るのは今宵かぎり、されば商船會社所有の汽船では長がい間の習慣とやら、今宵は別れを惜しむの意味もあるらしい、兎も角三等船室の方で船員諸君が隠し藝を乗客に御覧に入れるから夕食が済むだら見物に來れくれと云ふ記事が船内新聞に掲載されたので食後お醫者さん達と見物に行く、既に觀覽席に當てられた處には人を以て満たされてゐる、道樂商賣と云はれる船乗り達だけあつて、なか／＼に素人離れの處がある、藝が全く終つたのは十一時過ぎであつた。

(106)

上 陸

二ヶ月ぶりに内地の土を路みて感無慮、時恰も春の淡雪紛々として暑つい臺灣から歸つて來た我等には寒さが一入身に泌みる、我等の一行、それは船の中で知合になつた御互四人即ち東洋製糖の某君臺中病院の某君と毎日子に我等、此儘別れるも名殘惜しくて聊か物足りぬ感もあるとて、後藤旅館にて一休みして、其日の午後毎日子は大阪に、お醫者さんと砂糖會社の某君は東京に、我等は用事の都合で行を共にせず神戸に其儘一泊する、

船上と陸上とは氣分に於て餘程の相違がある、僅かに四日間と雖

(107)

船の上と疊の上とは非常なる趣の相異があり、船から上がつて疊の上に座はると何んとも云へぬ親しみが湧く、其の親しみが湧く疊の上で打ちくつろいで當分の別離、否な當分の別離と云ふよりも又何時の日に巡り逢ふものやら分らぬ御互なれば、互に健康を祝するの意味で盃を上げる。

東京に在任する臺灣系の人々

一瞥せる臺灣も之れで終はつたけれども彼地に於ける事業界の大立物や中心人物の多くは東京に在住せるが故に序を以て其等の人々をも合はせて月旦し、而して三井、鈴木の争覇戦に、郵船、商船、山下

の二三の商戦を記して此の稿を結ぶ、

下村前長官

事業界の名士を月旦するに先ち下村前長官を失敬する、下村さんが長官を退きて朝日新聞社に入社されたとき、下村さんを知れる人々の多くは其の出處進退のあまりに意想外なりしに驚かされてのよしあし評なるものは斯うであつた、下村さんの新聞社入は其の將來に花を咲かせるものだと言ふのと、野武士揃の新聞社に入つて將來を傷けねばよいかと云ふ不安組の二説に分れてゐたやうであつたが然かし下村さんの新聞社入りは確かに社會人の耳目を惹き爲めに朝

日新聞社は此の名士を迎えて特意であり、下村さんも又或意味に於て男振りを上げたことは事實だ、官吏生活から一轉して新聞社への生活と云ふ此の離業は下村さんの様な人でなくては出来ぬ藝當だ、こんな藝が打てる人でなければ今日の時代で思切つた仕事は出来ぬ下村さんには朝日新聞社の専務は寧ろ宰相となつて一國を料理するよりもヨリ以上意義があり愉快であるに違ひない、成程其の入社が發表された時こそ、社内に官僚を持つて來るとは怪しからん、一民政長官に何程の事が出來るとして、反對する人もあつた、けれども今日に於ける社内の空氣は何うかと云ふに、社内の人々も社外の人々も手腕の凡ならざるに敬意を表してゐるではないか、果して江南の橘

(110)

も之れを江北に移せばと云ふ比喻は下村さんには當拊まらず、我が下村さんには往くとして可ならざるなきの慨がある、

君嘗つて齡三十五にして貯金局長となりて人の意表に出で、轉じて臺灣總督府の民政長官となるや、下村が長官になる、民政長官の椅子も落ちたものだと云ふ輩もあつた、勿論それは岡燒半分の言草ではあらうが、

斯くて官界の寵兒下村さんは任地に在ると七年余、其間總督は代はつても下村さんは代らずに、相當の治蹟を擧げしとは此處に云ふまでもない、扱て下村さんの長官時代に於ける臺灣と、今の田總督時代に於ける臺灣とを比較して具さに觀察する時、臺灣の空氣なるも

(111)

のに餘程の相違あるを觀取することが出来る、督府の某高官は曰ふ前長官時代と今日の長官時代とは大變に相違がある、前長官時代は官吏の氣分にもダレ氣味があつて心ある人々は綱紀の肅正を叫んでゐた程左様に風紀が紊れてゐたが、今日では綱紀は肅正され官吏の執務振は非常に緊張して來たと、果して何れなりやを知らざれ共斯く曰ふ大官は先年渡臺の砌り、時折り令夫人御同伴で長官官邸に御機嫌伺に見える某勅任官である、此の人より斯くの如き事を聞く、我等は人心の離反甚しきに今更らの如く驚きもしたが、考へて見ると之れが所謂役人根性とでも云ふべきものであらうか、成程某勅任官の話されるが如く或は以前と今日と官吏の執務振りに緊張味ある

云ふことは事實であるかも知れぬ、何んとなれば現任總督のタイプが斯くの如きなるに賀來長官がまた、其れに輪をかけた事務家的タイプの所有者なるか故に自然部下の者も事務的タイプとなり従つて事務に忠實であるかも知れぬ、そう云へば督府の部局長が近頃事務家的に段々と萎縮して事務にのみ誤りなきを期するに吸々たるの態度が見えて毫も器に大なる點あるを見出せない感がある、

凡そ總督、長官、下つて部局長の椅子に在る者は自己所屬下の仕事を監督して誤りなきを期すれば以て足れりとする、長官徒らに事務上の事にコセ、つくは反つて事務の澁滯を招來するの虞れがある、爾云へば官判を押す長官とは長官か違ふと云ふかも知れぬが、官判

を押しても其れが盲判にならぬ様、平素部下を訓練し己亦部下を愛し且つ信ずればよい、部下を信ずることの厚つけければ厚きだけ、部下又上長官を畏敬して事務に誤りなからんことを期す、之れ即ち人情の然らしむる處だ、我等斯く思ふ時下村さんの殖民地に於ける施政振りに今更ら乍ら感心させらるゝと同時に某前民政長官が長官から内地の知事に成下がり、何時までも官吏生活に戀々として自己向上を知らざるの徒と、長官を辭せんとすに先ち時の總理大臣故原敬氏より京都知事を懇請されし時、下村でなければならぬと云はれるならば、地位の高下を論せず國家の爲めに御奉公することを辭せざれども、京都府知事ならば自ら他に人があるでせう、たゞ私は、閣下

に殖民地通の下村あるを御記憶置きが願ひ度いと云つて、其儘箱根あたりに雪隠れして原さんの懇請を退け、其後間もなく今までの境遇とは天地の差ある新聞社入をして、世人の意表に出る處誠に天晴れなものではないか、此の離業が出来ればこそ在職七年間長官たるの椅子を恥かしのす業蹟も擧げ得られたと云ふべしである。

東門の官邸訪へば丈高かき

君が姿のまぼろしに見ゆ

君去りて常夏の國うらさみし

あれも之れがかなしみに泣く

従三位新聞記者の肩書に

ふさはしからずと笑ふ人の世

限りなき力は我にあるものを

位階勲等捨てばやと思ふ

この位階この勲等を振り捨てて

我は住かなん自由の天地

藤山雷太君

今日では大日本製糖の藤山さんと云ふよりも商業會議所の藤山さんと云つた方が寧ろ通りか好い位だ、君は性來喧嘩好きな人、そして喧嘩すれば相手方を倒さずんはやまずと云ふの概ある人と聞く

(116)

尤も喧嘩と云つても取つ組合の喧嘩では勿論ない、其即ち敗げず嫌な氣象は眉間に刻まれたる幾筋かのものが之を證明して餘りありである、元來藤山さんには此の意氣と此の元氣あつて今日の地位を成せるもの、そしてその商業會議所の會頭となるや必ずや彼は手腕を發揮して、歴代會頭に見ざる藝當をやるであらうとは人皆之を期待したものであつたが、會頭となつてから間もなく病魔に犯されて床に親しむこと稍々久しきに亘り一時は起つ能はざるには非らざるかとまで危まれたが、幸に元氣回復せるは祝福すべしである、けれども今や病氣は全快したが藤山さんの名聲たるや漸やく薄く、其の名又社會より忘れられんとしつつかあるを奈何せんやである、我等は彼が

(117)

前半世のあまりに華やかなりしに批較して、其の晩年のあまりに振はざるを嘆しみとする、方今財界多事の秋、商業會議所の會頭たる藤山雷太君に晩年の發奮努力を望むものである。

榎 哲 君

今は糖界慘澹たるの狀にありて何時の日に往時の黄金時代を現出するや前途誠に心細きの状態にあると云ふのが一般砂糖會社の現狀である、さればにや榎さんの議論も此頃一層輪に輪をかけて來た、曰く經濟界の復興とか物價調節主義を高潮したところで何程の功がある、そんな手緩い事では到底駄目、此の財界不況の唯一救済策は

工業界は總べての事業を中止し、政府又事業を中止し、金の解禁は速刻之れを斷行し天下を擧げて委くの事業を中止するに限る、さればやがては景氣も回復する、尤も天下を擧げて諸有事業を中止すれば必然失業者が出来る、其の結果は食するに窮する者も出來やう、食するに窮して若し夫れ自ら餓死を欲せずんは宜敷海外に出でて職を求むべしだ、人間到處に青山ある、元來我國民は意氣地がなく、自分の生れ出でたる土地ほど好い處はないと思つて一步踏み出して働くこと云ふ事を欲しない、誠に以て憐れむべき民族だと榎さんの鼻息は益々荒い、彼元來街氣満々として一見俠氣もあれば、豪快味もあるやうに思はれるが果して彼の性格が其の風丰の示すか如きもの

ありやなしやは知る人ぞ知る、所詮彼は又案外の俗物であるかも知れない、若夫れ彼れに一片耿々の慨あらば、彼が云ふ如く、眠りて醒めざる怠眠性の我が同胞に、警鐘亂打がしてほしいものだ。

田村藤四郎君

君は帝大出身の逸才現に東洋製糖會社の常務取締役であるが其名あまりに多く世に知られてゐない、斯く申す筆者も君を知つたのは最近の事である、が、一度接して話を交えんか温厚にして頗る障りの好い人、此の人他社重役に比して其の名聲の左程までに非らざるは不思議のやうに思はれる、が然かし具さに周圍の事情を觀察する

とき其處に成程と思はれる一つの理由なるものがある、それは前社長下阪藤太郎氏が君の實兄であり、實兄の下に日向氏と共に常務であつて見れば、自然日向氏を表面に立たせて自分は陰に隠れて事務的方面を擔當せねばならぬ立場に在ると共に若夫れ君にして思ふが儘な手腕を發揮せんか、實兄であり社長である下阪さんも君と同じ責任の地位に在る日向氏に對しての氣兼ねあれば氣苦勞もある、だから君は其邊の消息を考慮して暫ばし隱忍自重したのであつた、君が名の表面に現はれざる決して故なしとせずだ、だが今や社長の下阪さん辭して新たに山成喬六氏其後任となり、常務の日向氏前社長と共に去る、山成氏は人も知る如く銀行家としては令名の高かき

人、されど未だ斯うした會社に、經驗のあしやなしやを我等は知らぬ、由んば山成氏に幾何かの經驗ありとするも實際會社經營の衝に當る人は君を措いて他に其の人がない、茲に於て乎多年に及んで隱忍自重し振はんとして振ひ得ざりし手腕が縦横に振はれるの機會が到來したのである、

要するに君は所謂未知數の人であつて其の如何なる手腕を藏する人かは今遽かに之れを予斷するに苦しむけれ共、新智識の所有者たる君に依つて、更らに會社經營上に面目の一新を見るに至るは、我等の疑を容れざるところである。

相馬半治君

明糖は本島製糖會社中屈指の大會社さればにや株價の如き何時も第二位にあつて會社の判判も宜敷、財界不況の今日と雖一割以上の株主配當を成し日糖と共に其の堅實味を見せてゐる、されば社長の相馬さん亦大に特意で、高輪の高臺に堂々たる家を新築し品川灣を眼下に涼しい顔してゐられるのも蓋し無理もない、

相馬さんは元官吏、所謂官吏上りの人と云ふが、君には少しも官吏臭い處がない、だか時折部下に對するとき昔の官僚氣質が出て怒鳴り散らす事もあるとかで、社員が君を恐れることは我等の想像以

上だそうな、扱其れは兎角相馬さんは世にも幸福なる人である、元來が地味一點張りの人だから所謂百姓會社の社長さんとしては最も適任の人と云はねばならぬ、此上にも南洋方面に於ける事業が算盤珠の取れるやうになれば相馬さんとしては先づ一安心と云ふ處であらう。

伊澤良立さん

社長の藤山さんは兎角圭角ある人だが常務の伊澤さんは社長さんと反對に極めて圓滿福德と云ふタイプの人、されば内に此人あるが故に他社との調和もとれると云ふものだ、往年財界好況時代に於け

る各製糖會社はその何れもが増資を行ひ、一躍資本金を倍額にする等其の發展振りに素晴らしき勢を見せ、砂糖株は非常に市場を賑はしたもので、増資した會社はシ、コ、タ、マ、ブ、レ、ミ、ア、ムを懐に捻ぢ込んだものだが、一人同社だけは増資もせず他會社の活躍振りを餘所に、堅實なる經營を續けて時流に投ずるが如きことをしなかつた、されば戦時中増資した會社の何れも一朝財界不況となるや四苦八苦の醜態を暴路し今日に至るも尙ほ容易に回復せず、其の株主への一割配當の如き、身を殺ぎての苦策であるに、我が大日本製糖會社に在りては優に二割の株主配當をしても尙且つ々として餘裕あるを示してゐる、要之に、高山長幸、伊澤良立諸氏在りて、専ら經營の任に

當つてゐるが爲めである、今や高山長幸氏常務の地位を去りて隠退す、君の責や又重なりと云ふべしである、君先年病に犯されて以來、未だ健康舊に復せらざるの憾みあれば財界不況の折柄此上にも自愛されんことを祈る。

角 さ ん

君は其の多くは臺灣本社詰めであるが故に本來なら、東京在住者の巻に入れるべきでないかも知れぬが、筆者の都合上東京の巻に入れて月旦する、

電力會社の副社長になるまでの君は督府の土木局長として一方な

らぬ巾を利かし時の長官だつた下村さんも時々君には一目置くやうなこともあつたとか我等は人傳へに聞いてゐる、君先年中立と銘打ち所謂普選即時斷行を看板に雄々しくも馬を陣頭に進めて鹿を中原に争つたことがあるが戦は君に利あらなんだ、戦の不利は負けず嫌な君に取りては定めし無念骨髓に徹するものがあつたに違ひない、だが角さんも靜かに戦跡を顧れば其の破れたのに不思議もないと思つたであらう、其れは兎に角角さんには豪らい處がある此人落選して以來は殊勝げに事業界の一角に鳴かす飛ばすを極め込んでゐるが、心の裡では來る十三年春の選舉を一日千秋の思で待ち詫びてゐることと思はれる、然かり君が議政壇上に起つの日を衷心希

望するが如く君の眞價は官吏時代よりも、實業家時代よりも、政治家になつて初めて顯れるものと我等も見てゐる、見よ議院に四百あまりの議員は居るか語るに足れりと成すの人物が幾人ある、それはほんとうに十指を屈するに足らず其の多くは金あるが故に、もしくは所謂地方の傳統的名望家と云ふが故に、肩書を所有してゐる連中のみで、彼等も人並に政黨政治のなんかと云つては豪らそうな顔はしてゐるが、政黨とはどんなもので政黨政治とはどんな者であるかをさへ知らざるの連中が多く、衆議院議員なんて聞いて呆氣あきれが踏ん反り返ると云ふものだ、之等の連中には主義も無れば主張もない、我が憲法布かれて何十年と云つて見たところで先づ議員の素質から

取り替へねば駄目、斯うした手合の連中が多い衆議院だから君の如き頭腦が好くて相當に經倫もあり抱負もある人が其中に投ずれば、一段と光を増し又人も陣笠扱にするまい、されば君も鹿は逐いたが金がないなど、消極的でなく、來るべき選舉には猛然として起つべしである、

若夫れ君にして君の將來を開拓せんと欲するならば、宜しく實業界を去りて政界に入るべしである、算盤片手に事業の繰延べはなどと云ふ如きは斷じて君の柄でない。

牧山清砂君

帝國製糖の社長は今時めく公爵松方の御曹子であり兄弟の情は格別で十五銀行が金に糸目なく世話して呉れるので、財界の不況を餘所に悠々たり得ねばならぬ筈だが、事實は其と反對で、今や四苦八苦の状態に在る、それには素より種々なる原因もあらうが爰には會社の内容を彼是れ批判するのではなくて、牧山さんを月旦するのだから横道に入るを避ける、

(130)

君は才氣煥發と云ふやうな人、されば聊か才に任せてヤリ過ぎるの觀がある、即ち此の才に任せて大根から砂糖を搾取することを北海道で試みた試みて見ると糖分の含有量は寧ろ多い、で、時恰も糖界は旭日昇天の勢を示してゐたので暑つい臺灣と寒い北海道の兩極

でシコタマ儲け出す積りであつたのが、忽如として押し寄せた財界不況の波、この思もよらぬ怒濤に流石の牧山さんも面喰らい、其れが喰止め策には北の端から南の端へ駆け廻はり死力を盡して抵抗を試みしも、此の自然の力には抗すべくもなく、經營上非常なる打撃に遭逢して社運は日に月に非なると云ふ運命に落ちた、だが、其處は君だ、何處を何う泳ぎ廻はつたのが今日では兎も角息を吹き返したやうだがまだ、之れを以前に返すには容易であるまい、だが牧山さんは徹頭徹頭自分の力に任せて進むの人、此の財界の痛手は君には何よりの試練であつた、此の試練に打勝ちし君が今後如何なる活躍を成すかは我等の興味を以て見るところである、才人折角自重

(131)

せよ。

中川臺銀頭取

島内に於ける經濟界の鍵を握つて今特意の壇上にある中川小十郎さんは幸福な人であると云はねばならぬ、今は以前頭取の櫻井鐵太郎氏が任期半ばに如何なる事情あつてか其の職を辭せし時中川さんも共に辭するものと世人は思つてゐた、然るに副頭取であつた中川さんは鰻上りに頭取の椅子に据はり副頭取には時の大藏省銀行局長森俊六郎氏が任命され、かくて中川さんは愈々頭取として自己の手腕を縦横に發揮するに差支なき立場となるや、先第一に行員の大異

(132)

動を成して腕の冴を見せた、此の人員の異動は即ち適材を適所に置くと云ふの主旨たるとは勿論であつた、適材を適所に配置した頭取の胸中では之より積極的に外に向つても發展を試みる筈であつたらうが、財界恰も之れより益々不況になると云ふ處であつたので内に準備は整つたけれども外に向つての發展を見合せて、事業方面の整理を成さねばならぬ必要に迫られたのであつた、それは財界好況時代殖民地に於ける産業の發展を助成するの意味に於て、中川さんが副頭取時代に事業方面に貸し出した多額の金があつた、それが思ひかけずも慘風吹き寄せたので事業家は今更の如くに驚き、中川さんも又面喰らつたに相違ない、而して此の慘風はなかくに深刻で、

(133)

大正九年秋以來既に三年あまりになるが益々不況の極に陥入らんとするの狀にあつて回復の曙光がない、従つて中川さんの苦悶も益さねばならぬ事になる、それに女房役の森さんが何うした事情の伏在してか任期半ばに辭したので、當面の問題は否が應でも中川さんの手に依つて處理しなければならぬ、けれども元來豪膽なる中川さん、世間では臺銀は大穴を明けて、其の前後策を如何に講ずるかが見物だ、中川も遂にはボロを出すに違ひない、と説を成すものは區々で、其の區々たる説は何れも臺銀整理不可能論であつた、時恰も内閣の一角に動搖あり、政客の往來頻々として繁く政界の風雲急ならんとするの秋、中川さんは紛々たる諸説をも銀行の整理をも餘

所に、西岡寺さんの命を受けてか、但しは受けないでか、其邊の消息は分らぬが兎も角も盛んに政界巨頭の間を相往來した者である、斯くして中川さんは當時の政變に乗じて一躍其名を中外に高からしむるに至つたのである、此の中川さんの政變時に於ける活動を指して陰口を云ふ者に、中川の奴西園寺の後光で政府當路の大官や政黨の巨頭に恩を被せ、他日の自己擁護策に腐心してゐると云ふ輩も決して一人や二人ではなかつた、而かし之れを中川さんに云はせると、乃公の履歷を知るものならば今頃左様な事を云ふ者は無い筈だ、乃公に若し政界に打つて出る野心があつたならば、二た昔も前に打つて出る、然るに今頃になつて我輩は何んの必要あつて、政友會幹部

連の御先棒を努むるの要あらんやだ、世間の有象無象が何と評するとも其れは評者の勝手たるべきで、一顧の價直もないよと空嘯く、然り中川さんはなかくに豪膽な人で世評に顧みるが如き弱はき人ではない、

此の中川さん政界巨頭連の間を去來せし事は今は昔の夢として、今日では往年自らが蒔きし種子を刈り取るべく銀行整理にベストを盡してゐる、其のベストを盡して整理せる結果、今日では整理の方も一段落を告げ、中川さんもホット一息の處だとは、先以て目出度い事と云はねばならぬ、中川さんは世間の實業家が花柳の巷に出入して、無意義な金錢を振り蒔き得々たるが如きの愚を成さず、若し

財に餘りあらば、之を育英事業に投ずると云ふ世にも稀なる事業家である、我等は此の財餘りあれば氏が經營せる學校に投じて他を顧みざる人格高かき點に二頃より敬意を表するものである。

山成喬六君

小柄で肅酒なタイプの持主、そうして銀行家として誠に申分なき人ださうだが中川さんが前年頭取の任に就くや、同行を辭して古巣であつた臺銀の一室を間借りして我國に未だ完全なる信託會社の無きを遺憾なりとして信託會社の創立に奔走した、けれども財界は君の爲めに利あらずして折角の企劃も容易に實現されず脾肉の嘆に堪

へず焦燥の日を送ること二年あまり、然るに浮世のことは廻り持ちとは山成さんに當掛まる言葉で、今度東洋製糖の社長さんが乃公は此の會社に来てから十年になる俗に十年一昔と云ふ、あまり一つ椅子に長かく据はつてゐれば世間から飽かれる、飽かれない内に辭めるのだと云ふ簡單なる理由のもとに辭するや君は其の後任に推されて社長の椅子に就いたのである、

糖界不況の今日社長に就く、なか／＼に容易なことであるまいが、多年金融方面に人となれる君に於ては其の金融は御手のもの、東洋製糖も又財界不況の折柄格好の社長を迎えたと云はねばなるまいだが山成さん製造會社と銀行とは其の經營振りにも格段の相違があ

らねばならぬ、況んや財界押靡べて不況の今日であつて見れば之れより劃策大に努め折角の期待を裏切るが如き事のなきやう祈る。

明糖の安田さん

明糖には常務に有島さんもゐる、有島さんは曩頃歐米を一廻りして來た人、此の有島さんと安田さんが今では社長相馬さんの手となり足となり否なく、參謀格とも云ふべき人であるが、有島さんは歸朝後主として同系統に依つて創立されてある菓子會社の方の事務を見てゐるから主として明糖の實務に衡つてゐるのは此の安田さんだ、安田さんは一見傲岸容易に下らざるの面魂をして居ので其の彼

に對する世評にも紛々たるものがあるが、親しく話て見ると極めて率直な人だが自ら否なりと信ずるものは飽迄も非なりとして之を斥げると云ふ、其處に確固不拔の意氣がある、惟ふに此の人此の意氣有が故に社長の信賴厚く、今日に於ては殆んど同社經營の鍵を握るに至つたのであらうと思惟される、我等は春秋に富む君の前途に幸あらんことを衷心より希望するものである。

(140)

三井鈴木の爭覇戰

兩社の臺灣に於ける活躍振りには大會社らしき或物を偲ばしむるけれどもその活躍振りの素晴らしきものがあるだけに弊害も亦認め

られる、弊害とは何ぞやと云へば、兩社商賣に拔目なく活動するが故に、遂には利を追ふに吸々たるの極、小商人に任せるべきものまで及ぶと云ふやうに、大商事會社としての面目上誠に遺憾な點が尠くない。

我等勿論商賣には全くの素人故、深く兩者の商戰振りを突込んで調査もしなければ又其の暇も持たないが、一瞥しての感想を以てせば、其の兩者の着眼點があまり小ではないかと思はれるのである、小資本家は曰く、三井、鈴木の如き大會社が財界不況の爲めに謂有方面に手を延ばすので、我等小資本家は彼等に先づ資本に於て壓倒され、折角の仕事もミス／＼彼等の爲めに取り上げられると云ふ

(141)

状態であるから、我々の商賈は實に上がつたりで誠に慘めなもので
すとの怨言を發する、然かり彼等小資本家が云ふが如く、大資本家
と小資本家が同一商賣の奪合を成すとき、小資本家は大資本家の
爲めに蹴落されるのは當然のことであらねばならぬ、

鈴木、三井とも云はれる大會社が如何に利を見るに吸々たるが爲
めとは云へ、商業道徳を無視してまで小資本家の領域を犯すと云ふ
が如きは誠に以て感服出來ない話である、我等は須らく大會社は大
會社らしく、若夫島内に目星しき仕事が無なければ、何も資本に不
都合があるでなし、臺灣を踏臺に南支南洋方面に進展を試むべきも
のではあるまいかと思ふ、況んや兩者の如きは總督府からも大に惠

まれ其の興へられたる土地の如き時價に換算せば蓋し非常なる額に
達するであらう、如斯恩惠を蒙つてゐる兩社、何を苦むで小資本家
の領域をまで犯すの要があらう、況んや鈴木竹内、三井の津久井
氏共に年齒若かく將來を有する人、如何に商業上とは云へ、あまり
に小事業に拘泥せず眼を大局に注いでは如何、財界不況の今日内に
相争ふよりも飛躍の舞臺を外に求むべきではあるまいか。

船會社のことども

歐洲戰亂當時に於ける船舶不足の結果は臺灣での郵商船兩者の態
度が以前に比して随分我儘を云ふやうになつて、船會社横暴の聲が

漸く喧ましくなつて來た、其の當時である、船成金として旭日衝天の慨を成してゐた山下汽船では、此の虚に乗じて多年商郵船兩會社に依つて開拓されたる臺灣航路に漁夫の利を占めるは此秋とばかりに突如として割込んだものだ、時恰も島内事業界に兩者横暴の聲漸やく喧ましきものがあつたので、何れも山下の舉に双手を上げて快哉を叫んだものだ、されば山下は百萬の味方を得たるが如き特意を以て茲に華々しき活躍を試みたのである、此の山下の活躍に今更らの如くに驚いた兩社は遽かに運賃の値下をすると云ふ即ち山下に對する對抗策を講じたのであつた、然かし山下に於ても充分の犠牲を拂ふ意氣込みで割込んだのであるから敢えて兩社の賃銀値下げに驚

かす堂々の陣を張つて對抗した、斯くして三ツ巴の商覇戦は今日に至るも繰返され、山下は其間多くの犠牲を拂つたが、その犠牲も今日では相當の結果を招來して、兎も角も算盤玉が取れるやうになり、兩社からは壓迫を受けても權利を獲得すべく其の努力を續け、月に年に得意を廣めてゐるのは先づ上出來と云はねばならぬ、

要するに多年に亘りて商郵兩社が開拓せる地盤に山下を割込ませたと云ふのは、餘りに彼等が戦時中の好況時に横暴を極めたのが大なる因をなしてゐると見なければならぬ、

扱て一瞥せる臺灣の稿もあまりに多方面に涉り、書けば際限もなく尙ほ此の稿に入りたい人々に星製藥の社長や中村啓次郎氏等の人

々が居るが、今は殆んど臺灣とは縁故が薄くなつてゐるので、此の稿に入れることを見合はせて、一先づ此一瞥せる臺灣の稿を締切ることとする。(終り)

大正十二年八月一日印刷
大正十二年八月五日發行

一瞥せる臺灣

定價金八拾五錢

著者 北原 碓三

東京市外大森町入不斗五百四十五番地

印刷者 比留間 潔

東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 株式会社 共榮會

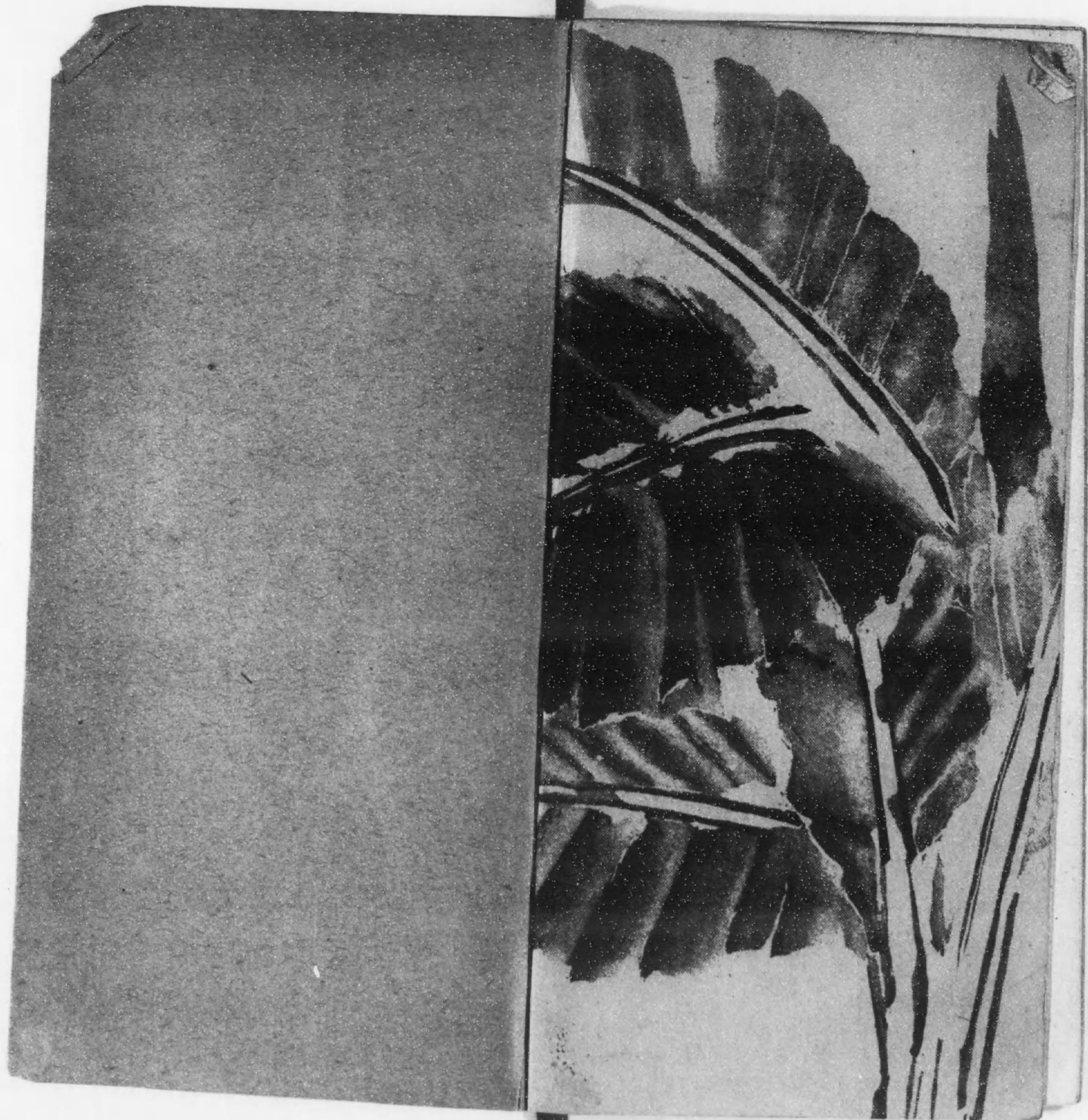
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所

東京市神田區永樂町一ノ一
丸内ビルヂング一階一四四号

拓殖産業協會

電話丸内二四二七番



576
170

終